
超能力と魔法な物語

根無草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超能力と魔法な物語

【Nコード】

N6984V

【作者名】

根無草

【あらすじ】

サラリーマン・啓志はある日、借金まみれの女性と出会う。実は啓志は彼女に過去に会っていた……。しかし、啓志はそのことを忘れており……。当人たちは気づく様子もない。

更に、彼女は三人家族の母親で……。(とてもそうには見えないが……。)

そして、啓志は失ってた過去を徐々に取り戻し……。啓志の日常は

普通では無くなっていく。

超能力、魔法使いや変な剣士・・・はたまた、組織？色々出ます。

ビールとカクテルとハイボール1（前書き）

えっと・・・自分勝手に書いた物なのでまとまりが無いかも・・・
超能力や魔法が出てくるのは・・・結構先です。

ビールとカクテルとハイボール1

ほろ酔い気味で、もはや何という名前だったか覚えてないが・・・、キャトリン、だったかキャットランだったか覚えてない。「いらっしやい・・・。」愛想だけは良さそうなバーのマスターらしき人物が挨拶をする。

取りあえず俺はその男の前の席が空いていたので、そこに座るところにした。辺りを見回すと、明かりを割りと暗くしてあり、他の客のカクテルが色鮮やかに見える・・・なかなかいい雰囲気のお店である。「何にいたしますか？」

と目の前の男が接客業特有の愛想笑いを浮かべながら聞いてくるので・・・

「取りあえず、カクテル！・・・きついのを！」

先ほどの同僚との飲みでビールをたらふく飲んでるのにも関わらず・・・俺はいつもの癖で強い酒を頼んでしまった。

「かしこまりました。」

・・・そういつて男が出したのはドライマティーニだった。癖で言ってしまったが、仕方がないので、一口くちにするがやはり、今の俺にはきつかった、戻しそうになった。それを堪えて飲んでいた。

「隣、いいかしら？」

そういつて、女性がカウンターの俺の隣の席を指しながらたずねてきた。

「ああ、構わないよ。」

・・・断る理由も無いので同意する。女性はそう目の前の男に言って席に座った。

「マスター、私はハイボールをお願いします。」

「どうぞ・・・。」そういつて、バーのマスターが女性の前にハイボールを差し出す。

「ありがとう」・・・そういつて受け取り、女性は一口ハイボール

を飲む

俺は隣の女性に目をやる

身長は150いくつ、髪は肩甲骨までの黒髪セミロングで、なぜか両サイドをツインテもどきな結び方をしている

服装は緑色のチュニツクを着ており、青色のジーンズだ

顔は暗くてよく解らないが・・・俺より若い・・・20代前半といったところか？

「君、なんでそんな髪型をしているんだい？」

不思議に思い尋ねてみる。

すると、女性の顔がこつちを向きキツとした顔で「そんなことをいきなり聞くなんて、あなたバカなの？」と言われてしまう。

こちらを振り向いた為ツインテもどきが揺れた・・・

彼女の髪はとても綺麗でキラキラと色鮮やかな黒い髪をしていた。

つい、触りたくなってしまふ。

暗がりの中の明かりが、その髪を色鮮やかに照らし、

黒猫のような鮮やかな髪がツインテもどきと共に揺れた

「ちよっと！人の話を聞いているの？」

「あ？ああ、すまない・・・。」どうやら俺は彼女の髪に見とれていたようだ

「全く、だから、おっさんってのは・・・。」彼女が呟く

「すまなかった、俺は啓志っていうんだ、君は？」不機嫌そうな彼女に向かって、改めて自己紹介する

「私、あなたに興味ないし・・・。」

と行って、そっぽを向かれるが「まあ、一杯奢るから・・・。」と言うつと

「はっ!? 何言ってるの!? 一杯とかきもっ!」

と彼女は言い信じられないといった表情でこちらをみてる……

「そんなんで女の子を落とせるとか、古っ!」

更に彼女は続ける……。

「わかったわかった……じゃあ、5杯奢るからせめて名前だけでも教えてくれ……。」

俺への文句を続ける彼女をさえぎりそう発言する。すると、

「5杯か。そこまでいうんなら、仕方ないわね……名前だけね……
・光栄に思いなさい!」

「私の名前は百合亜よ! 百人の人間に合わせられる。すばらしい人間なのよ!」

腕を組み、胸を張りながら、彼女……百合亜は自信満々に自己紹介をする。

「百人に……って、現時点で俺と合っていない気がするんだが……絶
対解釈を間違っているな、そりゃ。しかも、無い胸まで張ってるし……。」

俺がため息混じりにそんな呟きを入れると、(事実、彼女の胸は小さかった、細身の体格の胸に当たる部分に茶碗が二つあるような膨らみしかチュニツクの上から見えなかった。)

「ああん!? おっさんが特殊なだけよ! っていうか、何へんなとこ見てんのよ! 変態!」

と切れ気味に返されたので、さすがにムツと来た。(まあ、胸について触れたので、しょうがないのかもしれないが……。)

「いや、そりゃないだろう。ってか、俺はおっさんじゃない! 俺はまだ、30代前半だし、ちゃんと啓志って名前がある!」

とそう返した瞬間。

「……お客さん、静かにしてもらえませんか」

そういって、この店のマスターが「退店させるぞ!」と言った表情で俺たち二人を睨んできた。

「あ、すみません……。」「
二人ともマスターに謝りつつ、
「だから、呼ぶならせめて、名前で呼んでくれ……。」「
と俺は続ける。すると、彼女は渋々と言った感じで頬を膨らませながら

「解ったわよ！啓志さんね……。そう呼ぶわよ……。」「
と答えてくれた。しかし、

「その代わり！高い酒を奢ってもらわよ！」「
と条件がつき、俺が「え？」と思っている間に、

「マスター！一番高い酒！5杯分！」「

と言って、ハイボールの空きグラスを掲げると、マスターは待つて
ましたと言わんばかりに、

「と言われたら、こいつだぜ！」「

サッツ！とドライマティーニ、5杯を百合亜の目の前に置く。

「ありがとう」

「え？あ、ちよつと待てよ！」「

高い酒なんかおごらされたらたまったもんじゃないと思い。止めに
入るが！

「うるさいうるさい！！あんたのせいで酒が不味くなったんだから
これ位しなさいよ！」「

駄々っ子のように否定されてしまった……。胸が小さく容姿が
なり幼い為、本当に子どもが駄々をこねてるかのような錯覚を起
しそうだった。俺はこの事態に頭を抱え込んでため息をついて「解
った解った」と呟いた。

「物分りいいじゃない」

と言いつつ、彼女はご機嫌そうに、幸せそうにマティーニを口に運
ぶ。それを横目で見つつ、マスターが

「一気に酔わせて、すっかりやつちやいな！」「

と俺に耳打ちをして来る。「おいおい……。冗談だろ？」と言った
顔でマスターに顔を向けつつも、彼女に目をもう一度やる。

そういう態度に出たものの確かに・・・彼女は小柄で華奢な体つきをしており、胸も手のひらサイズで顔も美人・・・否、可愛いと言った形容が良く似合うくらいだ。半口リコン気味な俺にはぴったりかもしれない・・・。

そう思い、しばらく彼女が機嫌よく飲めるように、会社の話なども聞きつつ、機を待った。

しかし、そう時間も掛からなかった・・・やはり、彼女にはマティーニはきついのだろう・・・2杯飲んだところで、かなり口数が割りと減り、目がとろんと溶けたようになってしまった。

「因みに、今まで異性と付き合ったことある？」

俺は仕掛け始めた・・・。

「あるわよ？もちろん・・・なんでそんなこと聞くの？」

百合亜は不思議そうにこちらを見つめる・・・。

「何故つて？君が魅力的だからさ！」

俺は女を落とすための甘い笑顔を作る・・・。因みに自分で言うのは何だが、俺は割といい体格をしており細身だが、筋肉質な体をしていて、顔もそこそこだ。

「魅力的なのは当たり前でしょ！」

半目状態で眉をすこし吊り上げながら、そう言い返してくるが最初ごろの迫力も無い。

「じゃあ、普通の男たちはほっとかないわけだ・・・って事は経験済みだよな？」

と言いつつ百合亜の肩に手を回す。

「あっ・・・。」

彼女が驚き赤くなる。しかし、すぐその表情を隠し。

「も、もちろんよー！」

と百合亜は強気に出る。そして、取りあえず、定番の台詞で誘う

「今夜どう？」

と・・・。

「え！？あ・・・う・・・。」

百合亜は目を左右に動かし、戸惑う。まんざらでもないようだ。そして、最後にもう一度仕掛ける。

「おや、自信がない？なんだ・・・やっぱり経験したこと無かったのか・・・。」

と「なあんだ」と言った感じで手を戻し、立ち上がって店を出ようとすると、

「そ、そんなことはないわよ！行くわよ！行きましようよ！」

と席を立って口走ってしまった・・・。俺はそう聞くと、

「マスター、お金をここに置いとくぜ！釣りはいらないよ！」

と言って、お金をカウンターにおいて、百合亜の肩に手を回し、店を出た。

彼女はかなり面食らって、戸惑っていたが、断らせる前に計画通りホテル街に連れて行くことにした。

（数分後）

キラキラしたネオン街・・・と言ってもホテル街だが・・・に俺と百合亜は居た。

「ほら、どこにするよ？」

そう肩を抱いてる相手、百合亜に声をかけるが・・・しかし、百合亜は反応しなかった。否、出来なかったのだろう。彼女はかなり、てんぱってて顔が赤いまま下を向いていた。更にそわそわもしていた。その間に俺は百合亜の香りを楽しむ、石鹸のいい匂いだ・・・が、何だろつか・・・他の匂いがした・・・懐かしい匂いが・・・。・・・しばらく、ハイボールを飲んでいなかったからそのせいかもしれない・・・。

「え？あ・・・。」

そういつて、百合亜が頭を上げたときには、ホテルの目の前に立っていた。

「やっぱり、今夜は止め、ない？・・・。」

と困ったような顔で見せながら、こちらに言う・・・先ほどからのバーでの感じと言いホテル街でのそわそわした様子と言い、やは

り、

「君はやっぱり初めてなのか・・・やれやれ、だから背伸びをした
いお子様は困る！」

と、溜息混じりに言ってしまった。すると、百合亜はその態度が頭
に来たのか

「むっ！そんな訳ないでしょ！いいわよ！やってやるわよ！」

と大声を出したが・・・次の瞬間、

「うっ！」

と言って青い顔をして、口を押さえて座り込んでしまった。恐らく
悪酔いしたのだろう。

「ふう、しょうがないなあ、送り届けてやるよ。」

俺はそういつてタクシーを止めた、それを見た百合亜は

「いいわよ！帰るの位、自分ひとりで出来るわよ！」

と言つて、立ち上がつて、歩こうとしたが、すぐに気分が悪いから
だろう、へたり込んでしまった。

「ふう、やれやれ・・・。」

そついつて俺は彼女の肩を支えてタクシーに乗せた。

（数十分後）

「ありがとうございましたあ。」

タクシーの運転手がそついつて、車を出す。

俺は目の前のマンションを見上げる・・・。

「なんてポロポロなんだ・・・。」

目の前の建物は壁は黒ずみ、蔦が張り、今にも取り壊されそうなマ
ンションだった。

見た感じ、3階建てでエレベーターは無さそうだ。

「はあ、ここからは・・・一人で帰れるから！・・・。」

と言つて百合亜は俺の肩から離れようとするが、それほどの力が入
つてない。この状態で階段を登らせるのは危険だ。

「何階なんだ？」

百合亜に質問する。

「はあ、はあ、大丈夫だから・・・。」
そう言うものの、顔が「気持ち悪くて動けないです。」状態の顔で、全然言葉に力もなく、余裕が無さそうだった。

「こんな人間に一人で階段なんか登らせることなんかできるかよ！」
俺がそう怒ると、こちらを一度見て、

「・・・3階の301号室。」

と言って目を閉じて、俺に体を任せた。

「よっこらせ！」

気合を入れてマンションの横に付いている階段を登り始める。

（数分後）

「ふう、やれやれ・・・。」

3階まで、階段を登りきり、一息つく。携帯を見る・・・1時か・

かなり、遅くなってしまったな・・・俺。明日の仕事は大丈夫だろうか？と考えつつ、301号室の前まで着くと、部屋の明かりが点いていた。

「おい、これってどういう・・・？」

尋ねようとしたが、百合亜はもう答える気力さえも無さそうだった。どうなってるんだ？こいつの家？普通こんな時間まで出れるって言うたら一人暮らししかないだろうに・・・悩んでも仕方ないため。

ピンポン

玄関のベルを鳴らす・・・。

「はい？どちらさまでですか？」

何故か若い女の子の声が中からした、何がなんだか訳がわからなくなってくる。取りあえず落ち着いて・・・。

「あの、ええ〜っと、百合亜さんを送りに来たのですが・・・。」
若干ためらい気味に言うと、

「え！？お姉ちゃんを!？」

声の主は慌てた様子だった。

ガタガタッ

ガチャッ

部屋の中の光が外の暗闇にこぼれ出す・・・。

そう。これが、俺とこの家族との初めての出会いだった。

そして、俺はこの時、この家族とまるでカクテルのように交わり、混ざっていく事になるとは思いもよらなかった。

ビールとカクテルとハイボール1 (後書き)

まずは出会いです・・・読みづらいかも？

ビールとカクテルとハイボール2

「すみません、私の姉がご迷惑をお掛けして……。」
そういつて、玄関で出迎えてくれた女の子が正座でぺこりつと俺に頭を下げてくる。

「いえいえ……。ただ、放つとけなかつただけですから……。」「俺は首を横に振りながら答える。(まあ、ホテルに連れ込もうとしたからなんて、口が裂けても言えんな……。)」

「本当にありがとうございます。」
女の子が頭を上げる。それに対し俺は右手を頭の後ろにやり「はははっ……。」と困ったような表情を見せる。

「あ、今、お茶でも出しますね!」
女の子が立ち上がるうとする……。つい、女の子の胸に目が行く。うむ、割と大きな胸だ……。汁椀位ありそうだ……。

「あ、いえいえ。お構いなく……。」
と俺は答えるが、彼女は台所に立ってお茶の支度を始める。

しかし、狭い部屋だった……。1LDKだろうか? キッチンの他には奥に寝るための部屋しかなく、リビングと言っても、コタツを置いてすぐ横にキッチンが有るさまだ……。壁はボロボロ、床の畳もボロボロで、備え付けの棚も薄汚れていた。因みに、寝室との境は襖で区切られていた。先ほど百合亜をその寝室に連れて行ったのだが、うむ、これまた狭かった……。人が3人寝れるかどうか? の場所に布団を三つ敷いて寝ているようだった。「うん」という百合亜のうなり声が寝室から聞こえてくる……。まだ気分が悪そうだ。

「ふうっ……。」

そう溜息を吐きつつお茶を用意してくれてる女の子に目をやる……。ふむ、年は16〜18位だろうか……。高校生か? 身長は155cm位で体系は細身だが、抱きしめたらやわらかそうだ(特に胸が

？w）カフェオレのような茶髪の髪をストレートで腰辺りまで伸ばしており、先ほどから聞いている声は、高校生にしては落ち着いているが女の子らしさが残っていた……。人が来ると思ってたのだから……。白い水玉模様の赤いパジャマを着たまま作業をしている……。）（……。パジャマが余計に胸を際立たせるのは狙っているのか？。。。）

「ん。。。」
何やら、お茶を汲んでくれてる女の子とは別の声が出た。寝室の方からだ。

不思議に思い、俺は寝室の襖のほうに目をやる。寝室の襖は先ほど俺が百合亜を寝かせた際、締めたはずだが、今は少し開いている……。その隙間から体を半分出し又違う女の子がこちらの様子を窺っている。。。。

その子を見た目も幼く、12〜15歳位だろう、中学生だろうか？身長は145cm位で、体格は細身で肩までの短い青い髪を前で分けている、分けた右側の髪はヘアピンで留めてるようだった。胸は……。無いに等しい……。抱きしめたら犯罪になりそうだ……。ちなみに、服装は緑色に白い水玉のパジャマだ。。。。

「ぼーっ」

口で擬音を喋ってる！？その女の子はどこか呆けたような様子で擬音を口にした。

「。。。うちゅう。。。じん？」

そういつて俺を少しの間見た後、ストンツ！と襖を閉め、姿を消してしまった。

「。。。なんだ、あれは。。。？」

あれ呼ばわりするのは失礼かもしれないが。。。そう思うほど俺は面食らっていた。。。。

「どうぞ。。。」

そういつて茶髪の女の子はコタツ机に淹れたてのお茶を置いてくれた。ちなみに、台所から目の前のコタツ机までは3歩くらいしか離

れてない。寝室との距離も同じく3歩くらいの距離だ……。つまり、このコタツ机は丁度、キッチンのある部屋の真ん中に位置しているのだ。すぐに俺は顔を元に戻し、

「あ、どうも……。」

と答え、茶を飲もうと器をもつ……。熱い……。そして飲んでみる……。苦い……。世辞でも美味しいと言えたお茶じゃない。そう思って、顔を多少しかめてしまった。

「すみません、家は貧乏で……。そんな、不味いお茶しか出せないんです……。」

と目の前に茶髪の女の子は座りなおして、溜息混じりに俯いていた。

「あ、いえいえ……。お気遣い無く……。」

俺は焦り気味に答える。顔に出てしまうとは情けない……。

「……。」

「……。」

俺も女の子も何を話して良いか解らず……。女の子は必死に話題を探してるようだった……。しばらく沈黙が続き……。

「あ、ところでお姉ちゃんとはどういう関係で？」

やっと見つけた！……と言った具合で女の子が口を開く。

「ああ、いや、たまたま同じバーで会って、意気投合しただけの仲です……。」

（口説いて連れ込もうとしたなんてマジで言えねえなあ。）そう答えると、

「あ、そうですか、お姉ちゃんが男の人を連れてきたから……。時々、恋人さんかと……。」

彼女は残念そうに言う。が

「ぶっ！！」

有り得ないという思いからか……。お茶を吹き出しそうになった。

「あああ！大丈夫ですか！？ええ〜と……。私変な事いいました？」

吹き出しそうになった俺を見て、彼女は慌てふためいた。頭から汗マークでも出てそんなほどの慌てようだ。その様子は可愛らしい。

「ああ、いえいえ、別に何も……。」

そう言つて……ハンカチで口を拭く。

「?……そうですか?」

よく解らないと言つた感じでこちらを見る……。その様はまるで何も知らない子どものように無垢で愛らしかった。

「あ……ところで……お名前は?あ、私は瑠璃といいます……。」

彼女はそういつて自己紹介をする。瑠璃……見た目に合わない名前だ……。なんでそんな名前なのだろうか……。百合亜の方は性格上、よく似合つてそうだが……。

「えっと、俺は……嶋富 啓志と言います。」
自己紹介を返す。

「あ、じゃあ、呼び方は啓志さんでよろしいですか?あ、因みに、私のことは瑠璃つて呼んでください……。」
瑠璃は笑顔でこちらに話しかけてくる。

「ええ、まあ、解りました。」

苦笑いで返す。しかし、この子はよく喋るし、まるで疑いの無いような瞳で話してくる。そんな瑠璃にここについてから気になったことを俺は聞くことにした……。

「あの……つかぬ事を聞きますが、瑠璃と百合亜さんはご姉妹なんですよ?それにしては全然似てないのですが……。」

踏み入つてみる。そうである、百合亜と瑠璃は体格といい雰囲気といい、かなり違つていた。同じ人間じゃないんだから違つてもおかしくないだろう? と突っ込まれそうだが、それとは何か違う……

……こう、姉妹ならどこか顔形や笑い方などから来る似通つた雰囲気醸し出すはずだが……。しかし、百合亜と瑠璃はそんな所が無いのだ。

「え?……それは……。」

瑠璃は困ったように眉根を寄せて俯く。「うん、どうしよう。」
「でも、この人なら……。」等等聞こえたような気がしたが気のせいだろう……。多分。

瑠璃は「よしっ」と決心したようにこちらを真っ直ぐにみつめる。何か強い意志を感じる。

「私、信じてます、啓志さんが悪い人じゃないって」
そういつて俺の方を見つめ、続ける。

「実は私達……百合亜お姉ちゃん、の養子なんです！」
瑠璃はそんなことを言った。

「……養子……ねえ……」
ええええ！？」

「嘘だろ！？」

あまりにも現実味が無い……。

「いやいやいや……まさか……そんな……ただか、20歳
そこの女性がなんで年頃の女の子を！？」

「え……？っていうか私達！？」

あまりにも現実味が無さ過ぎるので勢いで質問してしまう。

「はい！もう一人居ます……。」

「白粉、大丈夫だから出ておいで……。」

そういつて瑠璃は襖の方に声を掛ける……。すると、

スーーツ……っパタン……トテトテ……トスンッ

「んしょっ！」

と襖を開けて先ほどの青い髪の少女がこちらを警戒したまま瑠璃の隣に座る……。

「……はあ……何故だい？」
ない……何故だい？」

びつくりを通り越して、呆れてくる……普通に考えて養えるはず
が無い……そこまでして何故、この二人を養子に迎えたの
だろうか……なんとなく興味がわいた……。

「え？」

何故か不思議そうな顔でこちらを見る瑠璃……。

「いや、何故？百合亜はそこまでして君たち二人を養子にしたんだい？」

常識的に言つて、有り得ない……。この事態とそんな事も解らないかのように俺を見つめてくる瑠璃をみて、混乱していた。

「えつと……。それは……。多分……。私たちが施設から出て、親戚にたらい回しにされるのが見えてて、しかも、お姉ちゃん、親戚の所で育つて……。その……。酷い扱いを受けたみたいだから……。例え、私たちが運よく親戚の所に行つても環境が悪いからつて……。」

瑠璃は目を伏せ、しどろもどろに成りながら答える。続けて、

「それに、私たちはお姉ちゃんに仲良くしてもらつて……。その良く甘えてたから……。」

「もしもじ」としながら瑠璃は答える。

「しかし、それでも、親戚に預けた方が金銭面的にも明らか、そちらの方が幸せになるはずじゃ……。」

瑠璃の言葉の中に何か懐かしい物を感じたが……。気にせず質問を続ける……。

「そんな他人任せに出来るような人じゃないんです！そんな……。無責任な事が……。ひつくつ……。できるひとじゃないんです……。いつ……。つも自分ひとりで……。背負いこんで……。」

そういつている最中、涙声になっている瑠璃……。その瑠璃の背中を固まった表情で、しかし涙を瞳にためながら背中をさする白粉（だったか？）

「う……。くつ……。」

絶句した……。まさか、ここまでであるとは……。余りにも非合理的過ぎる……。だが、同時に、俺はこの子達を支援したくなつた……。この子達が泣くほど百合亜は覚悟して養子に引き取り、辛い目に遭つて来ているのだ……。それを彼女……。百合亜は微塵も感じさせず強がり……。胸が熱くなつてくる。

「これをやる・・・なにか、困ったことがあったら連絡するんだぞ？・・・。」

そういつて、名刺を机の上に置く・・・。明らかに自殺行為だ・・・。取引相手でもない・・・知り合つて1日も経つてない、訳の解らない人間に個人情報である名刺を渡すなど・・・しかも、困つたら連絡しろなどといいながら・・・。だが、そんなことはどうでもよかつた・・・。信じてみたかつた・・・この家族を。

「俺は帰らせてもらう・・・。」

そういつて俺は玄関に行き、靴を履き始める・・・。

「えっ!? あ、ちよつと待つてください!」

そんな瑠璃の制止する声が聞こえたが・・・俺は無視して バタンツ っと玄関から出て、一気に一階まで駆け下り、道路に出て、丁度来たタクシーを捕まえた。目的地である自分のマンションを告げ

「ふう・・・。」

と溜息を吐き・・・。時間を確認する・・・何やら良く携帯が見えない・・・。

「・・・あれ?」

どうやら俺は泣いていたようだ・・・。俺は何故か家に着くまで気づかれまいと窓の外を見ながら静かに泣き・・・。家につき、ベッドに入りもう一度自分の携帯で時間を確認したところ・・・2時を回っていた・・・。

「ははっ・・・やべえな・・・明日はきついぜ・・・こりゃ・・・。」

涙ながらそう俺は呟いて意識を手放した・・・。

「ううゝむうゝゝゝ!」

薄い光が差し込む中、右目を擦りながら目を覚ました・・・。流石に昨日が遅かつたからだろうか・・・体がだるい・・・。

「今は何時だ?」

そう呟いて目覚ましを見る……。時計は6時半を指していた……。

「うむ、起きなきゃいけないか……。」「
体を起こす、出社が8時で、ここから会社まで電車で1時間掛かるため、6時頃には起きなければならぬのだ……。

モソモソツ……。

「よっころしょ!」

そういつてベッドから降りて立ち上がる。

「ああ、会社着のままだったな……。」

自分の服装を見て、昨日のことを思い出す……。1日で常識で考えられないことも起こる物だ……。俺もまだまだ経験不足か……。

「フツ……。常識的に考えれば、訳がわからない、おかしい事をしたものだ……。」

名刺を渡したことを自嘲気味に笑うが、悪い気分ではなかった……。

「まあ、それよりも、朝食をとらなきゃな……。」

そういつて、襖に目を向け、移動し始める……。実は俺の家、否、マンションの寝室は結構狭い……。ベッドのすぐ横、一人が通れるくらいの隙間をあけて箆笥が置いてある……。

落ち着くからこうやって狭い部屋にベッドを置いてるのだが、時折、箆笥にぶつかって不便なときもあるから困る……。

そう思いながら振り返り、寝室を見ていたのだが、向き直り手を掛けていた襖を開ける。

スツ……。

その音と共に目の前にリビングが広がる……。部屋の真ん中に長方形の木のテーブルがあり、その傍に椅子が4つあった……。テーブルは短い側面の方を寝室の方に向けておいてある。デザインが気に入って買ったのだが……。来客用としてこの部屋を使っているため、椅子も4つセットの物を買ったのだ……。そのテーブルの

向こう側にもう一つ中くらいの部屋があるのだが・・・そこは使っていない・・・半物置状態である。テーブルの上にトースターがあるのだが・・・。

「パン・・・あつたよな？」

俺はそう呟きテーブルの横を通り、キッチンの方に向かう・・・。キッチンにはリビングの横・・・。寝室からでて右の方にある。キッチンの冷蔵庫の上に置いてあるパンを確認した。

「うん、1枚でいいな。」

そう呟いてから俺はパンを1枚取り出し、リビングに戻り、トースターにパンを入れる・・・。

「ええつと・・・あと、牛乳か・・・。」

パンを取りに行ったのに、またもや、キッチンに戻り、冷蔵庫を開け牛乳を出し、キッチンの棚からコップを取り出してテーブルに持っていく。

「ふう・・・。」

牛乳とコップを置いた後、溜息をつきながら、キッチン側においてある2つの椅子の内、左側の椅子に座る。もう2つはキッチンの反対側・・・ベランダが有るのだが、そっちの方に置いている。

「テレビでも見るか・・・。」

そういって、リモコンでテレビをつける・・・。テレビはキッチンから見て一番右端の奥に設置していた。要は物置の壁とくっついてるのである。他愛も無いニュースが流れている・・・。やはり、世の中は不況のようだ・・・他にも、何処かの首相が暗殺されたとか・・・。暗い話ばかりテレビから伝わってくる・・・。俺はそんなニュースを聞き流しながら昨日の家族のことをもう一度思い出していた。

一番上は百合亜だったか・・・そして2番目が瑠璃・・・3番目が白粉(？)だったか？

それにしても、名前に統一性が無いと思えるのは俺だけだろうか・・・。まあ、いい・・・。

「親戚……か……。」

百合亜は親戚にたらい回しにされたり、運よく他の親戚に引き取られても、相当酷い人生を送ったのだろう……。例えば……。俺みために……。

「今思えば……。ロクな物じゃなかったな……。」

俺の場合、その親戚の子どもに対して、兄弟ではないから、やけに気を使わなければいけなかったし……。

その子供も親も俺を敵視していたし……。俺がちょっと良いことをしたらその子供も親もやたら張り合ってくるのだ……。だから、俺はあまり、青春時代は良い思いではない……。中学の頃は喧嘩に明け暮れていた気がする……。

「あの時期は何回、制服洗っても汚れてたなあ……。」
一度、番長格の人に目を付けられてから、何度も殴りあいになったっけな？

そして、その番長格の人を倒したら倒したで、他の学校の奴が殴りこみに来て……。大変だったような気がする……。おかげで自分の制服を自分で洗ってたんだが……。汚れない日は無かった。

「結局、大方は俺の一撃必殺……。3割パンチで沈んだけど……。」

しかし、それでも沈まなかった人間も一杯居た……。結構幹部クラスの間違った気がする……。

「そういえば、ヤーさんに誘われたこともあったなあ……。いやだったけど……。」

普通に暮らしたいのに……。ヤクザなんて、もつてのほかだ……。ちなみに今はもう、親戚とは連絡を取っていない。関係を絶ちかかったので、会社に勤める際に一人でアパートを借りて、勝手に出て行ったのだ……。まあ、あちらはそれで清々しただろうけど……。あの頃は……。何もかも他人のせいにしたかったのか……。それとも、救いの手が欲しかったのだろうか……。温かい家族を欲しがってた気がする……。

「そこからくるのかもな……。」

そう、恐らく、俺があ家族を信じてみたくなつたのは、俺が彼女たちにとつての百合亜のように俺を温かく引き取ってくれる人間を欲しがったことがあるからだろう。しかし、常識的に言えば有り得ないことである……。だが、彼女たちはそれをして見せようとする……。だから、尚の事、支援したく……。信じてみたくなつた。

「まあ、こんな俺にも親身になってくれる人はいるんだが……。」とある人物を思い出す……。青春時代に世話になつた人だ。

「最近あつてないな……。いや、会つてないならあつてないほうがいいのだが……。」

今はなんとか大手会社に勤めており、それなりの収入を得ている……。だから、見栄えの為なんかに、こんな2LDKのマンションなんかに住めるのだが……。まあ、だからこそ、助けたいとも思つた。今の自分なら少しでも助けになるはずだと思つて。

チーンツ

と音を立ててパンが飛び出してくる……。俺はそれを手に取り、口にほおぼる。

「しかし、俺もまだまだ青いのか……。」

考えていることが甘ちゃんな事なので、つい、そういつてしまつが……。別に嫌な気分でもない。

「寧ろその方が人間味があつて俺はいいと思うんだ……。」
そう呟く……。

……。ふと、ベランダ側の上の壁に掛けてある時計をみる……。6時45分を指していた。

「やべえ！」

そういつて俺は食パンを一気に食べて、牛乳を飲み干す……。駅まで5分掛かる為、予定では、そろそろ出ておかなければいけないのだ。

「やべえ、遅刻しちまうぜ！」

走つて台所の横の玄関に向かい、靴を履いて外へ出る。

・・・・・・・・・・・・・・・・それから、1時間ちよつと経ち、俺は会社のデスクに居た。

周りの人間が書類を整理したり、パソコンで人事関係の入力をしてる。

そんな中、俺は重要な書類を出そうと自分の机の鍵の付いた引出しを開ける。なにやら極秘と書かれたファイルがある。

「昨日、急に飲みに行ったから、目を通してなかったな・・・・。」俺の机は割りと離れてる為、何の問題もなくファイルを開く。

そこには他の会社の優秀な人物のデータが書いてあった・・・・。

「そういえば、昨日、俺はこんな命令受けてたか？」

そう、それはヘッドハンティング用の資料だった・・・・。俺がこれを任された理由は

「君、まだやったこと無かったよね？まあ、人事部の人間は一回はやるから・・・・やって見て！」

との事だそうだ・・・・。明らか試されている・・・・ここで上手いくかどうかで、俺の人生が試されているのだが・・・・。

「乗る気がしないなあ・・・・。」

そう呟く・・・・。正直な話、優秀な人物を引き抜くということは、他の会社に痛手を受けさせることには変わりはないのだから・・・・。

「まあ、そうも言つてられない・・・・やるか！」

そういつて真面目にファイルに目を通す・・・・。ターゲットは3人のようだった・・・・。男性2人に女性1人・・・・。

「ん？」

女性の項目をよく見てみる・・・・。

経理部 実蔓 百合亜 たかだか中小企業において置くには勿体無いほど多種多様な能力がある・・・・。しかしながら、業績は優秀ではあるが、性格に難があり・・・・故に周囲とのトラブルが絶えないようである・・・・。特に童顔かつ体系が幼児体系であることに触れると激怒するらしい。

そういう項目と共に、昨日バーで会った女性・・・百合亜の写真が張ってあった・・・。

「・・・おいおい・・・なんなんだ、こりゃ・・・。」
偶然にも程がある・・・はあ。と思う。そして、再度目を向ける。

「性格に難有りねえ・・・まあ、強烈だからねえ・・・。」
ふとバーでのことを思い出す・・・。髪の毛は魅力的でつい見とれてしまったが、確かに体は未発達で揚げ足を取られたら、子供みたくに「うるさい！うるさい！うるさい！」って口走ってたな・・・可愛かったけど・・・いや、俺はロリコンじゃないぞ？どつちかって言うと2番目の瑠璃だったか？にエロスを感じたし・・・。

「うん、俺はまだ正常だ・・・。」
そういつて気を紛らわした・・・つもりでいる。

「まあ、取りあえず、この子は後に回すか・・・。」
そう呟いて、他のページを捲る・・・。感情的になる可能性がある為、後に回すべきだろう。

営業部 吉田 宗明 外国帰りの優男なのに加え、お得意の微笑スマイルと話術で次々と女性との契約を取ってくる・・・が、一応、話術で男性との契約もあっさり取れるようである。逆にこちらの情報を聞き出される可能性あり・・・。

「外回りいつてきます。」
そういつてデスクを離れる。他の社員達の「了解しました」。という声を背にエレベーターに乗り、会社を出る。今日は男性2人に会って交渉しよう・・・特に吉田とかいう奴中心で。

トゥルルルル・・・トゥルルル

ピルの外に出てファイルに書いてあった、彼の携帯に電話を掛ける・・・。
まあ、営業マンなので知らない番号でも出ないということは

無いだろう・・・一度は出るはずだ・・・。

「はい、もしもし？」

出た・・・。営業トーク開始・・・。

「突然、電話を掛けまして申し訳ございません・・・私・・・
会社・人事部、嶋富という者です。」

「・・・何の用です？」

探るような間が入り、聞き返してきた。優しく青年らしい透き通った声のようだ、営業向きではつきりと聞き取りやすい。

「ええ・・・実は内密にお話したいことがございまして・・・できれば会ってお話したいのですが・・・。」

「人事部の人間がですか・・・ちょっと待つてください・・・。あっさり感づいたのか・・・何やらメモ帳を取り出すような音が電話口からする。そして、

「そうですね・・・じゃあ、丁度昼の12時頃が開いているのですが、その時間帯でよろしいでしょうか？」

こちらに聞いてくる。俺もメモ帳を取り出す・・・。うむ、問題ない・・・。

「はい・・・それをお願いいたします。」

「ところで、場所はどちらですか？やはり、うちの会社から近くない方がよいのでは？」

やはり、感づいている・・・こいつは手強そうだ・・・。

「できれば、そうして頂けると助かります。」

「では、駅前の喫茶店で、昼の12時頃に・・・。」

彼が言葉を締めくくる。駅なら彼の会社も俺の会社も距離がある為、会社の人間が来る可能性は低いのだ・・・。

「はい、では、お願いいたします。」

そういつて俺は電話を切る。さて、何時だ？と思い、時計を見る・・・9時か・・・。

「後、3時間後か・・・。」

改めて自分の服装を見る・・・見た目が芳しくない・・・昨日、仕

事着のまま寝てたせいで、シャツはよれよれである（上着は幸い脱いでいたらしい・・・本当に幸いだ。）

「ふむ、スーツ用のシャツを一着買って、着替えることにしよう・・・」
「
と言いつつも一人の男性に電話を掛ける・・・。

・・・3時間後、俺は駅前の喫茶店に来ていた。俺の目の前には男性が座ってる。例の彼だ。

短めの茶髪に白いスーツ、細身で背は・・・175か6くらいか？割と高い方だ・・・。そして、俺が渋くてカツコイイ系なのに対し、顔は如何にも優男な青年です・・・と言った感じだ・・・まあ、女性から言えば可愛いの種類に入るのだろう。そんな男が目を開けてるどうかわからない優しそうな微笑を浮かべながらこちらを見ている・・・女性ならイチコロだな・・・まあ、俺は男性だから、こいつが何を考えてるかわからなさそうな感を受ける。

「改めまして、x会社の嶋富です。」

俺は一礼する。それに呼応するかのように、

「こちらこそ、会社の吉田です。」

と一礼する・・・。そして、ニツコリとしたそのままの表情で続ける。

「貴社の製品は僕も結構好きなんですよ、愛用してるんですが・・・貴社のは吸引力がいいんですが長続きしないんですよね・・・困ってるんですよ。」

そんなことをこちらに、言ってくる・・・愛用者か！？これは行ける！と思ひ。

「そんな事は無いですよ！今度のわが社の新製品は吸引力の持続を武器にした製品です、どうですか？自分で売ってみませんか？」

と勢いをつけて言う・・・が・・・。吉田という男は

「そうですね、吸引力の持続性をねえ。」

フムフム・・・と言った感じで頷く・・・。と同時にニヤリと笑う・・・しまった・・・どうやら嘘だったようだ・・・。いきなりしくじってしまった・・・。

「ところで、ライバル会社の社員の私との契約はいくらくらいですか？」

彼は目を開けて真面目な表情で聞いてくる・・・まるで、真剣に考えてるかの様に・・・。

「今の契約の1.5倍を予定しております・・・。」
「俺は彼が契約をする気がほばないと判断して、交渉に掛かるが・・・彼のプライドを刺激してみるか・・・。」

「それ以上は掛ける価値はほば無いと判断されております・・・。」
「掛けてみるが・・・。」

「へえ・・・今の私の給料の1.5倍程度ですか・・・。」
彼の雰囲気为重苦しくなる・・・。彼の開いた目には笑顔が消え他人に威圧を掛ける視線・・・。気迫を感じる・・・。こいつは只者ではない・・・。なにか・・・。こう、普通の人間には無い・・・。何かを感じる・・・。しかし、そんな表情も一瞬だけ見せて、また、目を閉じニツコリとした表情に戻る。

「そうですか・・・それでは、私はお受けするにはいけませんね・・・この商談は無かったことで・・・。ここは私持ちで良いですよ・・・では、お互いがんばりましょうね。」

そういつて立ち上がり、お金を払って店に出て行ってしまった。

「・・・ふう・・・。」
彼の只ならぬ気迫に気圧されて、動けなかったなので、彼が去って安心した・・・。

トウルルルル・・・トウルルルル・・・
俺の携帯がなりだした・・・。

「ん・・・？」

確認してみる・・・見たこと無い番号だ・・・。

「はい？もしもし嶋富ですが？・・・。」

取りあえず出る……。すると、

「……実蔓です……。」

実蔓？だれだ……。？少し考え込む……。その為、間が空く……。
「ちよつと！解らないの？……私よ！百合亜よ！こんな可愛い声を忘れるなんて……。」

そう言われて思い出す……。確かに資料に書いてあったなあと。それに、名刺に携帯番号も書いてったっけ？

「ああ、で、どうしたんだ？」

「……。今夜、バーのキャトランに8時に来て……。」

「キャトラン？」

「昨日、一緒に飲んだでしょ！？」

「ああ、なるほど。しかし、何でだ？」

「いいから来なさいよ！」

この子は何故、こんな風に俺に対して偉そうなんだろうか……。まあ、いいけど……。」

「……。ああ、解ったよ。8時にキャトランな……。」

「絶対来なさいよ！来なかったら……。呪い殺してやるんだからね！？」

「ああ、解ったよ……。」

と言って電話を切る。そして、「はあ……。」と溜息をついた後……
・立ち上がり……次の男性との交渉場所に向かった……。

ちなみに、次の男性との交渉はほとんどん拍子で上手く行ったが、
後々、吉田と言う男の会社がウチの会社と同じ、吸引力の持続性の
良い商品をぶつけて来たのは言うまでもない……。
夜8時、俺は例のバーに来ていた……。

「誰をお待ちで？昨日の子とは上手く行ったかい？」

カウンターに座ってるため……。バーのマスターが聞いてくる……。

「さあな……。取りあえず、ドライマティーニ！」

曖昧に答えておく……。

カランカランッ!

店のドアが開き、見たことのある黒髪ツインテもどきが見える。百合亜だ。

キョロキョロと辺りを見渡し俺を見つけた……。

「来てくれたんだ……。」

そういつて笑顔になって、俺の隣の席に座る……。

「ああ、まあな。」

俺がそう答えると、

「べ……別に嬉しくなんか、無いんだからね!」

そういつて頬を赤らめながらそつぽを向く。照れてるのか?

「しかし、なんで俺を呼んだんだ?」

質問する……。

「えっと……その、この間のお礼がしたくて……その……あり……がとう」

そつぽを向いたまま答える。そして、

「だから……今日は私のおごり……って事で……。」

「いや、それは遠慮しとくよ……。」

「どうしてよ?同情?」

百合亜の顔が急に険しくなる……。琴線に触れかけたようだ。

「いや、そんなんじゃない。君と楽しく飲みたいだけさ……。」

甘い笑顔で答える。マスターが「憎いねえお兄さん!」と小声で言ってきたが気にしない……。

「ばばば、ば……ばつかじゃないの!」

さらに、彼女は照れたのか……更にそつぽを向く。少し間をおいて、

「……あ……あ……あなたがそこまで言うなら仕方ないわよね!」
と言って、やはり照れたまま向き直す。

「ああ、そうしてくれ。さあ、楽しく飲もう……どうだい?調子は?」

俺は促し話を始める……。

こうして、俺と百合亜は週に何回かこのバーで飲むようになった。このバーで百合亜の会社の話や人生の話やいろんな事を話した。こうすることで、少しはこの子の理不尽な世の中の安らぎになればと思い・・・まあ、彼女の嫌う同情からなのだろう。その辺が彼女にはれなきやいいが・・・。

ビールとカクテルとハイボール2（後書き）

何故か主人公・・・ヘッドハンティングしてますが・・・私の知識不足です・・・普通は外部企業に頼むはずなのですが・・・いやはや・・・失敗した。

会社と思いと海（前書き）

展開的におかしいところは所々ありますが・・・想像力のなさのせい
です。

会社と思いと海

目の前で僕より5つくらい下の女の子が泣いている……。何となくは解るが……。確証がないため……。聞いてみる。

「どうして泣いているんだい？」

僕のそんな言葉に対し、女の子は泣きながら答える……。

「ひつく……。だ……。って……。ひつく……。みんな……。な……。ひつく……。私のか……。み……。のこと……。変って……。言うん……。だもん。」

そう言われて僕は女の子の髪を見る。鮮やかな黒い髪だ……。そう、あの女に良く似た……。黒い髪……。

「確かに……。この施設じゃ、珍しいけど……。俺は綺麗で良いと思うよ？」

そう、この施設は色んな所から人が集められるため黒髪は珍しいのだ……。その為、珍しい髪の間人はいつもいじめの対象になる……。かく言う、僕もご多望に漏れず黒髪ではなく……。銀髪なんだが……。

「え？ひつく……。グス……。ほんっ……。とう……。？」

彼女は少し泣くのを止めて……。グズリながらそう尋ねて来る。

「ああ、本当さ！」

出来る限りの満面の笑みで返す。俺は確かに、そう思っていた……。僕を庇って、動かなくなつたあの女の髪は確かに美しいと……。綺麗で良い髪だと思っていた。そして、その髪によく似て鮮やかな黒い髪である目の前の女の子の髪もまた……。綺麗だと思っていた。

そんな言葉を聞いて……。ペアアつとも音が出そうなくらいに、見る見るうちに女の子の表情が悲しみから喜びに変わり……。

「お兄ちゃん、お名前……。なんて言うの？」

女の子は喜びに満ち溢れた表情で名前を尋ねて来る。

「……。啓志だ……。」

僕は答える……。自分の名前を……。憎らしくもあり、それでいてあの女の愛情を同時に感じてしまう自分の名前を……。

「ケイシ…？…あたし…　　って言うのよろしくね！」

そういった後、オズオズと僕に手を差し出してくる…。僕はその手を取り…。

「ああ、よろしくな…。」

と答えて握手する。

「えへへ…。」

彼女は嬉しそうに笑っている…。本当に幸せそうに…。

「あ…れ？」

そんな時、僕の顔を見た彼女が不思議そうな顔をする…。

「どうしたの？その傷？」

僕の額には石で切ったような後があった…。

「ああ、これは…君をいじめてた奴らを殴った際に、油断してね…。」

「

さつきまで、この子はいじめられていた…だから泣いていたのだ…
そんな光景を木の上から見てた俺は居てもたつても居られず、いじめっ子たちが一通りいじめ終わって、彼女の傍から離れた後、もう二度とそんな事をしないようにとボコした。

「え？」

彼女がびつくりしたような顔で僕を見る。と同時に眉を吊り上げ

「べ…別に…あ…あれくらい！自分でどうにかできたわよ！」

と顔を真っ赤にして怒り、そっぽを向く。僕はあっけに取られてしまった…。

「そうか…。」

そう答えるのが精一杯だった。が、

「だけど…ありが…ありがとう！」

彼女は向き直りそんな言葉を顔を更に赤くして僕にいった。

「ああ、いや、どういたしまして…。」

彼女はどうやら素直になれないらしい…僕も似たような所が…いや、僕とはちよつと違うか…。

「ねえ？」

見つめて考え込んでいるところに、彼女に話しかけられる。

「ん？」

「ケイ兄…って呼んでも…いい？」

顔をもう火傷してるのではないかと思うくらいに赤くして、尋ねて来る。

「ああ、いいよ…。」

僕がそういうと…彼女は満面の笑みで無邪気に喜んでいた…。

それからと言うもの、彼女は施設内では僕の傍を離れなかった…。だけど、いつも彼女は素直ではなく…。彼女が僕のためにしてくれたことに対してお礼をいうと、

「べ…別に…ケイ兄のためじゃ…。」

と言われ。彼女がいじめられるのを助けたりすると…

「べ…別に…あれくらい…ひとりでどうにかできたわよ！」

等と顔を真っ赤にして言う…毎回怒られる理由が解らないが…。まあ、別に悪い気分ではない…何せ…そう言って怒った後は必ずお礼を言ってくれるのだ…それに、この施設で初めてできた友達だから…。

俺は表情が硬い…というより、どう表現したらいいのか解らないのだ…彼女に見せた満面の笑みだって…あの女の真似をしただけである…。そんな俺はいつも、一人だった…無視されてたのだから…何せ、無反応だからな…。いつも木に登って景色を見たり、海を見に施設の海岸に行ったりしていた…。

彼女と一緒に行動するようになってからは、俺が海を見に行くときは、彼女も一緒に来る事になった。

「……………」

ザザア

無言で砂浜に座って海を見つめる二人の子供…。

「ケイ兄はなんでここ好きなの？」

ふと、彼女がこちらを向きそう、聞いてきた…。

「静かで…自然を感じれるからさ…。それに、ここには俺たち以外の人間も居ないから…安心できるだろ？」

そう言つて適当に誤魔化す…。本当はあの女の事を考えてるのだが…。

「へえ、そうなんだ。」

彼女はなるほどといった感じで海に向き直る。そんな彼女を今度は俺が見る。

何故だろうか？…たった黒髪である…という類似点だけで彼女を助けた…そして、一緒に行動している。

しかし、彼女の腰辺りまでの黒髪を見れば見るほど、彼女の髪は鮮やかで…綺麗で…美しくて…同時に…あの女を思い出す…錯覚してしまう…。だから優しくしてあげたく…助けなくなったのかも…れない…

「ど…どうしたの？ケイ兄？」

彼女は見られているのに気づき、顔を赤くしながら尋ねて来る。

「い…いや、なんでもない。」

僕は赤くなって俯いてしまったが、同時に彼女もうつむいてしまった。

…そうだ、彼女に髪留めでもプレゼントするかな？

そしたら、あの女が喜んだように…喜ぶかも。

そう思ったのだった。それから、彼女と一緒に過ごす日々がしばらく過ぎ…。

ある春の日の海岸での事…。

いつもの様に、僕たちは海を見ていた…。だが、突然…

「ねえ…？なんで…この頃…助けしてくれないの？」

そう彼女が話しかけてきた…。

「……………」

答えられずに僕が無言で居ると

「べ…別に…ケイ兄の助けが…いるわけじゃないけど…。」
と罰の悪そうに顔を俯かせる。

その頃は、僕はもう彼女に対するいじめを見ても、あまり助けに入らなかつた…。(度を越していたら助けたが…。)

何故ならば…。

「実は…俺は…今月でこの施設を出ることになったんだ…。だから、もう君には一緒にいらなくなるんだ…。」

(ちなみに、彼女の前では一人称を俺とされていた…だってかつこ悪いだろ？僕じゃあ…。)

「え？」

彼女が驚いたような顔をする…。それにかまわず続ける…。

「だから、君には一人で立ち向かえるようになって欲しかった…俺が居なくても大丈夫なように…。」

「…っ!？」

彼女はその言葉にショックを受けたようだった…。俯き、そして泣き始める…。

「バカ！バカ！バカ！なんで？なんで…そんなこと今言つたのよ！ケイ兄なんか…ケイ兄なんか死んじゃえ！」

泣きながらこちらにそんな罵倒を浴びせる…。しかし、そんな罵倒もすぐに言葉じゃなくなり…。

「うわああああああーん！！」

と大泣きを始めた…。僕はあの女がそんな俺を抱き寄せたように彼女にもする…。

僕の胸で彼女が泣き続ける…。彼女の頭を撫でる。とても艶やかで綺麗な髪だ…。本当にあの女そっくりだ…。

手を止め、空を見上げる…。僕はまた守れないのだ…。あの女のとくと同じように…。僕はまた失うかもしれない…。そんな衝動が僕を覆う…。だから、僕は彼女に強くなって欲しかった

た・・・わざと手を出さなかった。彼女には僕が居なくても強く生きて欲しかった・・・。僕を庇うような・・・そんな存在にはなつて欲しくなかった・・・そんな存在には・・・。

「ぐすつ・・・ぐすつ・・・。」

僕が思いにふけている間に彼女は落ち着いたようだ・・・。そして、泣き止むなり立ち上がり。

「べ・・・別にケイ兄なんて、頼りにしてなかったんだから・・・どこにでもいけばいいじゃない！」

そっぽを向いて、そう言ってくる・・・。僕はそれを無視し・・・彼女の前に回る。

「これ・・・やるよ・・・。」

そういって、彼女の手にはピンクの星型のアクセサリーが髪留めを二つ渡す・・・。

「え？」

彼女はビツクリしたような顔を見せるが・・・すぐに、怒ったような泣いてるような顔になりながら・・・。

「こんな・・・こんな・・・こんな物要らないわよ!!!!」

といて・・・砂浜に髪留めを投げつけられた・・・。

「ケイ兄のバカ!もうどつかいって!!」

そう言ってこちらを睨みつけて来る・・・仕方ない・・・。

「ああ、じゃあ、またな・・・また・・・いつか・・・絶対にもう一度守って・・・助けて・・・みせるからな。」

彼女とあの女を重ねて・・・そう言ってしまう・・・。

「うるさいうるさいうるさい!早くどつかいって!。」

腕を振り回し、こちらをポカポカと殴りながらそう言う・・・。

「ああ、解った・・・。」

僕はそのまま、背中を向けゆっくりと彼女から離れ・・・施設へ向かう・・・。

「うわあああああーん。」

彼女の大泣きする声を背中に聞きながら真っ直ぐ施設に歩いていく。

。。。

僕は絶対にもう一度会い・・・守ってみせると今一度誓った・・・。

チユンチユン・・・。

パチッ！

小鳥の声に目を覚ます・・・。なんだったのだろうか？今の夢は・・・。

「やれやれ・・・変な夢だった・・・。」

そう言って起き上がる・・・と・・・その瞬間。

バコンッ！

と音を立ててたんすの扉に頭をぶつけてしまった・・・。

「いててて・・・。」

箆笥の扉を閉める。

「狭いのも考え物かな？」

おでこを抑えながらベットから降りる。

「さて、着替えるか・・・。」

もそもそ・・・

しかし、妙な気分だ・・・さっき見た夢はやけにリアルで、懐かしさを感じた・・・。

上着を着て、台所に向かう・・・。

「そういえば、俺は中学より以前の記憶が無いな・・・。」

夢に見た女の子は6歳位の子で・・・だとすれば助けていた男の子は12歳くらいになるな・・・。

パン1斤と牛乳を持ちリビングに向かう。

「うーん、なんで俺、中学以前の記憶が無いんだろう・・・。」

椅子に座り、テレビをつけ・・・パンを焼きながら考える・・・。
全く解らない・・・。

「まさか、さっき見た夢が自分の子供時代とか？」

そう口にして、すぐ、馬鹿らしいと思った。あまりにも有り得ない。

「第一に俺は黒髪だ……。」

そう呟いてテレビに注目する……。

やたら、どこぞの会社が倒産したの……円高だの……不景気な内容ばかりが流れてくる。

「やれやれ……俺の会社もあおりを受けなければいいが……まあ、大丈夫か。」

テレビの時計が指し示す時間は6時30分……。

チーンッ

と音を立てて、パンが出てくる。

「やばいな……急ぐか……。」

そう言つて、俺は手慣れた手つきで、パンを口にほおばる……。

モシャモシャとパンを租借すると……牛乳の入ったコップを掴み……一気に飲み干す。

「うぐっ……ふう〜。」

喉に詰まりかけたがどうにかなった。

「さて……行くか……。」

そういつて玄関から外に出る。

1時間後……。またもや俺は会社のデスクに居た……。

「ふう、通常業務は大変だ……。」

そういつて、俺はパソコンの画面を覗き込む。

その中にはあらゆる社員の個人情報（住所、電話番号等）や身辺情報（例えば、どんなことが問題になってるか？など）がそれぞれの社員に関して事細かに書かれている。

「ふうむ……やれやれ、どこもかしこも問題だらけだな……。」
資料を見ながらそう呟く……今は昇給・昇格等の選別作業……兼、給料の割り当て確認だ……。

まあ、給料の方は管理職の奴らが大方決めるので、ほぼ作業レベル

の仕事なのだが……。

「しかし……各部署……色々と厄介な人間が多い……。」
チラホラ見ると、やれ自己中心的だとか……部下の信頼がないとか……人が良くても成績が悪いとか……。そんなものばかりである。経理部も同じだ。

「こんな中に百合亜を入れるのは、人事部としても、人としても忍びないな……。」

いくらチャンスであっても、ある程度なじんだ会社を抜けさせて、この会社の経理部に来るのは負担が大きいし、更に、ヘッドハンティングで来たにしてはあの性格では……人当たりも良くはない……。資料に書かれるくらいだから……よっぽどのことなのだろう。そんな状態で……ここに来たら絶対上手く行かないからなあ。」
あの性格をどうにかしないと、経理部ではやっていけない……。だから、俺は百合亜にはヘッドハンティングの交渉を一切しなかった。
結局、俺は3人の内、吉田以外の現場関係の男しかヘッドハンティングに成功しなかった。そのことを報告した際には、

「うーん、まあ、一人できただけ、良しとしようか……。通常業務に戻っていいよ……。」

と眉根を寄せながら渋い顔で言われてしまった……。俺の昇進終わったな……。とは思ったが……仕方ないだろう……。次のチャンスが来れば絶対に見返させるか……。(もう来る事はほぼ無いだろうが……。)

そんなこんなもあって俺は今日、昼過ぎまで、従業員の給料査定や昇格の調査等の業務をこなしていた。

「ふうう~~~~。」
椅子に座ったまま、背伸びをする……。時計を見る……。1時過ぎだ……。

「ふむ、昼飯でも食うか……。」
そう呟き、席を立つ……。

「昼いってきまーす。」

その他の社員達に声を掛けて、オフィスから出る。
食堂はビルの一階に有る為、一階までエレベーターを使う……。

食堂でご飯を食べながら……ふと思った……。

「いつもなら、この辺の時間帯に掛かってくるんだがなあ？」

そういつて、携帯を開いて確かめる……着信履歴は無い……。
百合亜の事だ。毎週、この金曜日にのみに行くことが多いのだが……。

「今日は行かないのかな？」

「まあ、それならそれでお金が掛からないから良いんだが……。」

「結構きついし……。」

ぼりぼりと頭を右手で掻く……実を言うと完璧なる割り勘ではなく毎回、俺が大目に払ってる……彼女に気づかれないうちに……彼女を気分良く酔わすのもその為もある。

「そうでもないよ……なんか……。」

そういつて、俺は携帯を納める。

食堂でご飯を採っている間にもやっぱり何も連絡は無かった。

それから、俺はオフィスに戻り、今度は通常業務の一つである保険等の書類整理、作成を行った。その作業は夜まで続いた。

午後7時を過ぎて家に帰ろうとビルの外に出ると

トゥルルルル……トゥルルルル

携帯が鳴り出す……。

「ん……？」

携帯を取り出す……見たこと無い番号だ……。

「はい、もしもし……嶋富ですが……。」

とりあえず、知らない番号だが出る……。

「ああ！良かった！繋がった！」

何処かで聞いた声だ……。若くて無邪気そうな女性の声なんだが。

・・・。

「えつと・・・どちらさまで？」

思い出せないため、間の抜けた調子で聞き返す。

「私です・・・瑠璃です！」

そういわれて思い出す・・・。

「ああ！・・・それで、どうしたんだい？」

「お姉ちゃん、知りませんか?!」

瑠璃は慌てたような様子でこちらに尋ねて来る・・・。これはただ事ではなさそうだ・・・。

「・・・いや、知らないが・・・百合亜がどうしたんだい？」

瑠璃を促す。

「お姉ちゃんが・・・お姉ちゃんが、居なくなっただんです！」

「・・・。。どうして？」

訳が解らない・・・あれだけ仲のよかった家族がどうしてそんなことに・・・？

「まあ、いいや・・・話は後で聞こう・・・。瑠璃ちゃんは家にいるんだね？」

とりあえず、落ち着いて話を聞こうと思いい家に向かおうとする・・・が

「いえ、えつと・・・私達、今、家にはいないんです・・・。」

予想外の言葉と、しおれた様な返事が返ってくる。ええ？家にいない？どうして？じゃあ、電話、何処から掛けてるんだよ？

「じゃあ、何処にいるんだい？」

「ええつと・・・あ！残量が！ええつと・・・詳しくはバーのマスターに聞いてください！」

ブツッ！・・・ブツブツブツ。

電話が切れてしまった・・・。バーのマスター？えつと・・・どこだ？

「・・・。。。」

立ち尽くして、無言で考える・・・。あの家族関連なら・・・。

「キヤトランか！」

手を叩きながら呟く……。さて、こう言う時こそ冷静に……。そう考えながらも……。俺はタクシーを捕まえようと走り出していた。

カランカランッ

「いらっしやい。」

バーのマスターがそう言って出迎える。

「はぁ……。はぁ……。」

俺は息を切らしていた……。走りすぎか？「もう年かな？」と言いたくなるな……。

ズンッ！ズンッ！ズンッ！

そんな音がしそうなほど、俺はマスターに焦って近寄っていた……。冷静でないといけないと解ってるのに……。移動中の車の中で考えていたら……。余計に焦りを感じていたのだ。

「危機迫るっといったような顔だね？」

おやおや？つと言ったような顔でこちらを見る……。

「俺はあんたに聞けといわれて……。ここに来たんだ……。」
そうマスターに言う。

「ふ……。あんたには関係ないことなのに……。何故首を突っ込む？」

そういつて、俺を見てくる。確かにそうではある……。が、

「あんたには関係ない！さっさと教えてくれ！」

俺はマスターに対して、焦ったような、懇願したような目をしていただのだろうか？睨みつけたつもりだったのだが……。

「ふつ……。いい目をしてるな……。ほれっ！」

「ここを尋ねる……。そこに居るはずだ……。」

そういつて何やら書かれた紙を渡してきた……。

「……。」

俺は無言で受け取り、踵を返して出て行く……。

カランカランッ

「ふっ……いい奴ではあるが……そこが命取りにならなきゃいいがな……。」

マスターはそう呟いた。

「はぁ……はぁ……。」

走る走る……目一杯走る……。何はともあれ早く合流して、探すのを手伝わなければ……。百合亜は一体どうしたと言っただろう？……。そういえば、飲んだるときに色々と妙な話を聞いた覚えもあるが……。走ってるせいか……。思い出せない。

それに、何故、瑠璃は家に居ないんだろうか？ひよっとしたら……。

そう思うと更に焦りが増し、更にスピードを上げようとしてしまう……。

走ること20分、マスターから貰った紙に書かれてる住所に着いた。途中までタクシーを使ったのだが……。手持ちが切れて、途中下車して走ったのだ……。運が悪い……。割と俺の家に近いようだった……。

午後八時を回っているため、暗くてよくは見えないが、普通の一軒家らしきものが目の前に立っている……。

「はぁ……はぁ……。ふう……。。」

息を整えながら、住所を確認……。間違っては居ない……。家の周りには塀があり、玄関の横には割りと育った木も立っていた。

「とりあえずは……。ベルを鳴らしてみるか……。」

そう思い玄関に近づく……。玄関の前に着いた。

「!？」

何か危険な気配を感じ、とっさに右に飛びのいて避ける。

ブーンッ!

その瞬間、飛びのいたのとは逆の方向、左から何か重いものが空を切る音がする・・・空き瓶だ！

「なにっ!?!」

青年のような声がする・・・。

俺は左足を左後方にずらし、体の真正面に音のあった方向を向ける。白い上着を着てない学生服の青年が立っている・・・丁度、瑠璃と同じくらい年だろうか？背は中くらいといった感じた・・・顔は暗くて解り辛いが・・・いくなれば、ジャーニーズ系のかっこいいタイプだ・・・ちよつとムカつく。

「まさか！今のを避けられるとは・・・。」

そういつて、青年は瓶を投げ捨てる。俺は昔から、不意打ちなど・・・ああいう類に関する勘だけは良く働いた・・・虫の知らせ？というのだろうか？とにかく危険を感じるのである・・・そのお陰で、俺は中学時代に何とか生きてこれた・・・。

「おっさん！ここは・・・通さねえぞ！・・・あいつらは・・・俺が守るんだ！」

青年がそう口走る・・・。

「あいつら？」
やはり、ここであっているようだ・・・そして、口を開こうとした次の瞬間に・・・

「うるさい!」

そういつて青年はこちらに向かって拳を握り締めながら、勢い良く踏み出してきた。

「つく!」

距離が2、3歩しかないといたため臨戦態勢に入ってる間もなく青年に間合いを詰められる。

「おりゃあ!」

右 右 左 左 右 左 左の順に青年の拳が飛んでくるが・・・俺は難なく左右に避けてかわす、そして後ろに下がりながら距離をとる・・・が。

「このやるつ！」

ビュンビュンビュン！

彼のパンチの連打は終わらない……仕方ないな……。
俺は狙いを定める。

右……左……右……フックが続く……。だが、そろそろ、
「くそ！これで！」

来た！

そんな台詞と共に彼は右のストレートを放つ！それを左前にステッ
プしてかわし……

「オラア！」

ドスンッ！！

真横から腹に右の拳を打ち込む。

「ぐっ！？……」

彼の上半身が前のめりになり……腕が下がる……。完璧に入っ
た……。これでもう気絶するはずだ……。そう思った次の瞬間！
ガッ！グイッ！

「何！？」

腕を掴まれ、そして一気に引き込まれる……。引き込むと同時に
彼は体制を立て直していた。

「ぐっ……おりゃああ！！」

彼が気合を入れてそう叫ぶと……
天地が逆転した……と思っていると……ドスンッ！つと音と共
に背中に激痛が走った。一本取られていたようだった。

「はあ……はあ……」

しかし、青年は息を切らしており、手の掴みが甘かった……。
「はっ！」

手を振りほども、横に転がって間合いを取る……。
「はっ！？……しまった！？」

彼は「迂闊だった」とでも言わんばかりの顔をした。

その間に俺は立ち上がる。かなり距離を取れた……。5歩くらいだ

るうか・・・この距離が俺にとって一番ベストだ。

「くそ！」

青年は悔しがる・・・そんな青年に対して俺は

「なかなかやるじゃないか！俺の3割腹パンチを食らって気絶しないなんてな・・・。」

と声を掛ける・・・。それに対し青年は

「ふざけんな！あんなへなちよこパンチで気絶するわけ無いだろ！」
と強がって見せてたが・・・実際はかなり効いてるようだ・・・お腹を辛そうに押さえていた。

「こちとら、練習で、もつときついのを受けてんだ！」
更に強がる・・・。

「そうか、なら、少し本気で行かせて貰うか・・・。」

そう言つて、俺は臨戦態勢になる・・・。もう少し強めに打ち込めば気絶するだろう・・・さて、気合を入れるか・・・。

「つく!?!」

彼はまた、構える・・・。

「・・・。」

空気が変わる・・・沈黙が張り詰めたような感覚に陥れる。次で決まるだろう・・・そう思っていた・・・が・・・何やら彼は俺の方を見て驚いたような顔をしていた。

「そ・・・そんなマジック見せたって・・・怖くないからな！」

彼がそんなことを言う・・・。なんだ？何のことだ？全く解らない・・・何を言ってるんだ？

「なんのことだ？」

そう尋ねる・・・が返事は

「うるせえ！行くぜ！」

そういつて、彼がまたも勢い良くダッシュしてくる・・・その瞬間！

「やめてください!!!」

闇夜に悲痛な声が響き、俺たちの動きが止まった。彼は拳を打ち込む体勢のまま…俺はそれを左手で捌いて、右拳を打とうとする体勢のまま…声の方に顔を向ける…。

「瑠璃ちゃん!?」「瑠璃!?!」

二人同時にその声の主の名前を呼ぶ…。そう、視線の先には瑠璃がたっていた…。しかも、かなりご立腹のようだ…。しかし、怒っているのは俺ではなく、どうやら青年の方に怒っているようだ…。ズカズカズカツ!

そんな音が鳴るかのように青年に近づく…。青年は一気に青ざめた顔になる…。瑠璃の方に向き直り、今にも弁解をしようとする。

「ああ、えっと…これは…。」

「隆平!なんで啓志さんと殴り合いなんかしてるのよ!」
頭からお怒りマークが出そうな程だ。

「いや、その…これは。」
隆平と呼ばれた青年はしどろもどろである…。俺は臨戦態勢を解く。

「言い訳はいいです!」

そう言つて一括すると…。瑠璃はこちらを向いて、ペコリツと頭を下げる。

「すみません、私の同級生が…。ご迷惑をお掛けして…。」
そつといい終わると瑠璃は頭をあげる…。

「え…。いや…。同級生つて…。瑠璃…。お前…!」
隆平(だったか?)が何やら訂正しようとしていたが…。

「取りあえず、外は寒いですから、中に入りましょう!」
と言つて瑠璃が遮つてしまう。何かあるのかな?そう疑問に思ったが俺は何も聞かないことにした。

「ささ、こちらへ…。」

そう言つて、瑠璃は家の中へ入る。隆平も腑に落ちないと言つた感じで洪々と瑠璃に続く。

「ふう、何がなんだか？・・・やれやれだな・・・。」
そう呟いて、俺も後に続いて家に入る・・・。

俺たちは・・・客間だろうか？そのような部屋に居た。部屋の中央にソファがテーブルを挟んで向かい合わせに置かれている俺が片方のソファに座り、もう片方には瑠璃と白粉が座ってる。二人とも学生服だ・・・夏服の・・・やはり、瑠璃が着ると何もかもなかえろ・・・いや、何でもないぞ？ちなみに、隆平は彼女たちの右後ろに立っていて、俺を睨みつけてる・・・何故なんだ？さっきの殴り合いを引きずっているのだろうか？

「どうぞ・・・。」

瑠璃がお茶を出してくれた。

「それで、どういうことだ？それと、やっぱりまだ見つかってないのか？百合亜は・・・。」

聞きたいことが山ほどあるため・・・一気にそれを聞こうとするが・・・。

「えっと・・・ちょっと待ってくださいね・・・すみません、今から話し始めますから・・・。」

そう制止され、俺は沈黙し・・・そして、瑠璃は息を「ふうっ。」と吐いて答えた・・・。

「実は・・・お姉ちゃんは・・・勤めていた会社から辞めさせられたんです。」

「・・・。。。。ええ！？なぜ!？」

俺は本当にビックリしていた・・・曲がりなれど、ヘッドハンティングされるほどの人材だ・・・辞めさせるのは、明らかにその会社にとって不利になるだけである。

「ええと・・・その・・・お姉ちゃんの態度？とか人間関係がどうも上手く行かなかったみたいで・・・それで、その上、不景気の煽りを受けて止めさせられる人が多くなって・・・それで・・・。」

瑠璃が言い辛そうに答える……。なるほど、確かに会社が倒産するような不景気だ……。そういえば、一緒に飲んだときに、百合亜が人間関係で愚痴ってたっけ？社長が悪いとか……。あいつが悪いんだから私は悪くないとか……。

「なるほど……。で、どうしてここにいるんだ？しかも、マスターがここ知ってたし……。」

俺は先を促す……。

「ここは……。マスターの家なんです……。マスターは一人暮らしみたいで……。」

なに！？ここがマスターの家だと！？どんだけ稼いでるんだ？こんな一軒家を持つてるとか……。まあ、あれか、俺より上だから当たり前なのかな？ そんなことを考えている俺に気づかずに瑠璃は続ける。

「私達……。借金が積み重なって……。しかも、あのマンションの家賃も溜まってて、仕事を止めさせられた事を大家さんに知られて、追い出されたんです……。」

瑠璃がしゅんつとなる……。うん、落ち込む顔も可愛らしい……。はっ！？いや、俺はロリコンじゃないぞ！？等と自分で突っ込んでる俺に気づかずに更に瑠璃は続ける……。(どうやら、隆平と白粉は気づいてたのか……。隆平はムツとした顔をし、白粉は不思議そうな目をしていた。)

「そんな中、あのキャトランのバーのマスターが家を貸してくれたんです……。」

と瑠璃が締めくくる。

「なるほど……。で、百合亜は？」

……。俺が本題を尋ねる……。

「あ……。まだ……。見つかってません……。近所や会社の社長さん等を当たってたんですけど……。」

瑠璃の顔がどんどん暗くなってくる……。

「なるほど、それで俺にも連絡が掛かったのか……。」

「はい……。」

瑠璃は下を俯いたまま答える……。

「んで、その男は誰で……なんで俺を襲ってきた？」

「ずーっ」と疑問に思っていた事を俺は尋ねる……。名前はさっきから聞いているので解るが……。互いに自己紹介してないのでどう話しかけたものか……。困っていた。

「あ、えっと、この人はその……。」

顔を上げ、瑠璃が説明しようとする……。が、隆平は「ずいっ！と瑠璃の前に出てきて、

「俺は 大田 隆平！瑠璃の彼氏だ！」

そう自己紹介をする……。なるほど、彼氏が……。それでさっきから俺を睨んできてたのか……。

「ああ！もお！！」

「俺がおっさんを襲ったのは、借金取りかと思っただからだよ！」

瑠璃は隆平が自己紹介をしている後ろで「ああ……。言っちゃった……。」「と言わんばかりの嫌そうな顔をしていた。

「借金取り……。酷い話だ……。まあ、いいか。俺は嶋富 啓志

だ。百合亜とよく飲みに行く友達ってどこかな？」

襲ってきた理由も聞けたし取りあえず、そう返す……。

「なんで飲み友達が……。」

と隆平が突っかかって来そうに成るのを、俺は

「それで？心当たりは探したのか？」

と瑠璃に聞いて流す……。

「はい……。色々と探してみたんですけど……。」

彼女がまた暗い顔に戻る……。

「そうか……。どうしたものか……。」

写真で人に聞いて探すか？いや、もう午後9時だ……。こんな時間にいる人は酔っぱらってあてにならないだろう……。しかも、何処に行ったか見当が付かなければ……。探しようが無い。

「……。」

「・・・・・・・・・・」

沈黙が流れる・・・・・・・・ふと一言

「なあ、昔、百合亜姉ちゃんも施設に住んでたんだよな？その辺じやないのか？」

隆平が言う。確かに、それは一理ある。俺も期待をして、瑠璃に視線を向ける。が・・・

「そんなところ行く訳無い！あんな・・・あんな・・・あんなところ！急に瑠璃は立ち上がり、そう泣きながら激怒した！それを見た隆平は「ごめん・・・・・・・・」としよんぼりし、俺は

「え？どうしたんだ？」

とつい尋ねてしまった。

「ああ、いえ、なんでもありません。やだ、私ツたら・・・すみません、お見苦しいところを・・・・・・・・」

顔を赤くしつつ、また座った。そんな瑠璃を不思議に思いつつ俺は「そうか・・・・・・・・」

と答えた。そんな時、

ちよんちよん・・・・・・・・

と白粉が無表情に瑠璃の袖を引っ張った・・・・・・・・

「え？何？白粉？」

と瑠璃が耳を傾ける・・・・・・・・。白粉は瑠璃に耳打ちをする。なんだろうか？

「え？でも・・・施設は・・・・・・・・え？海？・・・そういえば！」

瑠璃が白粉に耳打ちされながらそう呟く。そして、耳打ちが終わると

「啓志さん、一つだけ、心当たりがあって行ってないところがあります・・・・・・・・」

と瑠璃が話し始める。

「うん？どこだ？」

俺が促す。

「施設の近くの海です・・・・・・・・」

瑠璃が答える。よし、なら・・・・・・・・

「そこへ行こう！今はそれしか当てが無い……。」
俺は立ち上がる。

「え？でも……ここからかなりありますし、お金も無いですし……そこにいるとは限りませんし……。」

瑠璃が渋る……よほど行きたくないのだろうか？

「大丈夫だ！……この近くに俺の家がある。そこに俺の車があるから……それで行こう！」

そう瑠璃に言っていると、瑠璃は一瞬迷ったが……

「はい！行きましょう！」

と元氣よく、決心したように答えた。

会社と思いと海（後書き）

想像力が・・・文章が・・・乏しい・・・orz

会社と思いと海2

ブオオオオオオーン！

夜道の海岸線沿いを俺たちは走っていた。因みに、今、車に乗っているのは、俺と瑠璃と白粉と・・・隆平だ・・・。隆平は俺に対して、ライバル心があるみたいだから、付いてきて欲しくなかったのだが・・・まあ、瑠璃の彼氏だから・・・仕方ないのかもしれないが・・・。

「しかし、なんで海なんだ？」

ルームミラー越しに瑠璃に質問する・・・。俺以外は全員後ろに乗っている・・・。

「ええっと・・・私達がお姉ちゃんと一緒に施設に居た時に・・・ふと、いなくなることがあったんです・・・。」

瑠璃が思い出しながら・・・いいにくそうに答える・・・。

「うんうん。」

相槌を打ち、話を促す・・・。

「そういうときは、いつもなんか・・・お姉ちゃん・・・暗い顔をしてて・・・。大体、お姉ちゃんがそうやって居なくなる時は、髪の毛の事を触れられたり・・・施設の・・・後だったり・・・。そんな感じで辛いことや、落ち込んだときにいなくなってたの・・・。」

施設の・・・の辺りが聞こえなかったが・・・追求しないようにしよう・・・その辺りを言おうとした時の瑠璃の顔が苦痛に満ちていたし・・・。

「ふむ、つまり、辛い時なんかになくなってたわけだな・・・。」
グググッ！

それを聞いてハンドルを握る力と、余計にアクセルを踏む力が強くなる・・・急がなければ・・・。

「はい・・・それで、何回か消えてるうちに・・・気になって・・・

付けていったんです・・・そしたら・・・近くの海にいたんです・・・それで、お姉ちゃんはぼーっと海を眺めてて・・・その時のお姉ちゃんは・・・とても寂しそうで・・・まるで誰かが来るのを待ってるかのような、感じでした・・・」

寂しそう？何故だ？そんなことを思っている俺には気づかず、瑠璃は続ける。

「あんなお姉ちゃんは・・・初めてでした・・・いつも、苛められてる私達を助けてくれたし・・・泣いてる私達を慰めてくれたし・・・常に一緒にいてくれて、いじめっ子から守ってくれたりしたんです！」

涙声で瑠璃が語る・・・俺まで泣きそうになりそうだ・・・

「だから・・・だから・・・そんなお姉ちゃんを見ると・・・いつか消えてしまいそうで・・・悲しくて・・・悲しくて・・・うつ・・・ひつく！・・・ひつ・・・うああん！」

とうとう顔を伏せて泣き出してしまった。消えてしまいそう・・・か・・・ふう、やはり急がなければ・・・もう俺達が出発してから30分を過ぎてしまっている。

「・・・誰を待っていたんだろうな？」

何の気なしに・・・俺がそういう・・・と、瑠璃は「ぐすつ・・・すん・・・。」と涙を拭いながら・・・

「ぐすつ・・・えつと・・・確か・・・お姉ちゃんの・・・お兄・・・ちゃんって言うてました・・・」

「お兄ちゃん？」

俺が聞き返す・・・

「はい・・・お姉ちゃん・・・その人に一時期守ってもらったことがあるそうです・・・その人のことを話すときは幸せそうです・・・」

瑠璃が答える・・・お兄ちゃんて・・・守ってたねえ・・・

「・・・そうか・・・」

俺はそうやって相槌を打ち・・・会話を終える。

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
そして俺達は海に着くまで無言だった・・・。

キキイイイツ！

アスファルトの上の白線に車が止まる・・・。周りは木々に囲まれている・・・。山の中だ。海岸線を走っていたのだが・・・。駐車場は海と反対の山の中にあるらしく、俺達は途中で山道に入ったのだ・・・。

「ふう、ついた・・・が・・・ここからは・・・海まで案内してくれ・・・。瑠璃ちゃん・・・。」

俺がそう言って、車のドアを開けて降りる・・・。ここは施設の駐車場だった・・・。瑠璃いわく・・・。ここしか駐車場がないらしい、その為、ここの駐車場を使った・・・。

目の前に広がる木々に囲まれた建物を見上げる・・・。確かに、「施設」と形容していいだろうが・・・。児童養護施設とは言えない・・・。なにかを・・・。何かを感じる・・・。確かに、真正面から見えるのは教会型の建物だ・・・。養護施設と言ってもおかしくはない・・・。が・・・。夜だからはずきりとは見えないが・・・。奥行きがとても有る・・・。養護施設にこんなに奥行きが必要だろうか？たくさん預ってでもいたのだろうか？・・・。教会型であり、森の中、しかも、今は使っていない様子で、どこもかしこも錆びれていた上、建物の汚れが奇妙な模様を描いている・・・。不気味としか感じれなかった・・・。バアン！

と音を立てて、俺に続いて、後部座席にいた3人も降りる。

「は・・・い・・・。」
青ざめた顔で吐き気を抑えるかのように答える・・・。瑠璃はここに近付けば、近付くほど気分を悪くしていった・・・。最初は震えだし・・・。最後は口元を押さえる始末だ・・・。しかし、そんな

状態でも、瑠璃は頭をブンブンツと横に振り……。

「こつちです！」

といって、駐車場の横にある、小道に案内される……。もう使われてない道の為……。木々がうつそうと茂っていたが、それに構わず、俺たちは進む……。一応、海岸までの道は整備されているらしい……。アスファルトの階段だった。

山の中の小道を抜け、道路を横切り、海岸の方へ出る……。

「ここです！」

そう言つて、瑠璃が立ち止まる。

暗くてあまり見えない……。月明かりだけが砂浜と海を照らしているようだ……。海と砂浜がキラキラ輝いて幻想的だ……。しかし、どこかしら懐かしい感じがする……。何処かで見たのだろうか？

「ザァー……」

穏やかな波が流れていて……。耳に心地よい……。百合亜を見つけるため、目を凝らしながら辺りを見渡すと、足跡があった……。良く見えないが……。足跡の先……。波打ち際にポツンと、黒いスートの人が座っている……。なんだか、本当に放って置けば、消えてしまふような……。そんな危うい雰囲気を感じる……。

「あれか!？」

俺がそう呟くと……。

「あ、多分、そうです……。いつもあの辺りでした……。」

と瑠璃が同じように目を凝らしながら言い、頷く……。やれやれ……。とりあえずは無事でよかった……。

「よし!連れて帰ろう!」

そう言つて、隆平は歩みですが……。

「ダメ!」

と腕を掴まれ、瑠璃に止められてしまふ……。

「なんでだよ!？」

隆平が瑠璃に怒つたような口調で言う……。

「隆平じゃ、ダメなの!」

負けじと必死な声で、隆平を引き止める……。それはそうだ……。こんなところで他人が出るべきではない……。まして、俺など……。と思い、もう一度、百合亜の方を見る……。
「だろうな……。ここは家族である……。瑠璃か……。白粉が……。うっ!？」

そう言いかけた時、百合亜の背中を見つめていた視界がかすみ、フラッシュバックを起こす……。そのとき、百合亜が座っているところに、銀色の髪少年と黒色の髪の少女が並んで座っている映像が見えた……。今朝の夢か?……。そう思ったところでフラッシュバックが止む。

ドクンツ!ドクンツ!ドクンツ!

心臓が早鐘を打つ、同時に奇妙な感覚が俺を襲っていた……。

「はぁ……。はぁ……。」

「どうしたんですか?頭なんか抑えて……。」
瑠璃と隆平……。そして、白粉が不思議そうにこちらを見つめる……。

いつの間にか、俺は頭を下に向け、頭を抑えていたらしい……。心臓の鼓動は収まってきた……。

「いや、なんでもない……。」

そう俺は答える……。そして次に俺は、普通に考えると信じられない言葉を口にした……。

「俺が行く……。」

「えっ!？」

「は?」

「……!？」

俺の言葉に三人は三者三様の驚きの言葉を吐き出す。(もつとも、白粉は驚いた様に、眼を大きく開いてこっちを見ていただけが……)。

「頼む!ここは俺がどうしても行かないといけない気がするんだ!」

そういつて、瑠璃たちに頭を下げながら言う……。自分でも解らないが……あのフラッシュバックの後から、何か……ここで俺が行かないといけない様な……行かなかつたら何かを破ってしまうような……失ってしまうような……そんな感覚が！……そんな感覚が心の奥からしたんだ！

「……わかりました……お姉ちゃんをよろしくお願いします。」
そんな俺を見て、瑠璃は一瞬迷ったが、意を決したかのように、ペコリとお辞儀をする……。

「ありがとう！」

俺はそう一言お礼をいって、百合亜の方に向き直る……。

「え？あ、ちよつと待てよ！？」

と隆平が抗議しようとするが……了承を得たので、そんな事は無視して、俺は、百合亜の足跡を辿って、百合亜の座っている、波打ち際に向かって歩いていく……。

ザッ……ザッ……ザッ……ザッ……ドザッ！

そんな音を立てながら、俺は百合亜の隣に座る……。そして、俺は海を見つめる……。

「……。」

そんな俺を百合亜は一度だけ見て、また、海のほうに顔を向ける……。目は死んだような目だった……。

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

長い長い沈黙が続く……。二人とも喋らない……。ただ座ってるだけ……。俺は百合亜が口を開くのを待っていたのだ……。

俺は確かに、この海に見覚えがあった……。先ほどのフラッシュバックでわかったが……。今朝の夢の中に出てきていた……。しかし、それだけではなく、俺は懐かしさを感じていた……。そして、懐かしさだけでなく……。切なさも……。

「……ここはね……私の……思い出の……場所なの……」

ようやく、百合亜がぼつりぼつりと言葉をつむぎ始める……。

「ここは……私が『施設』に居た時に、出会った、ある人との思い出の場所なんだ……。」

「その人は、あまり喋らないけど、いつも私のことを見ていてくれて、いつも、私を守ってくれていたの……。私……施設では、この髪の色で苛められててね……。ほら、瑠璃とか白粉も黒髪じゃないでしょ？……施設ではそんな子たちばかりだったから……私の髪色は珍しかったのよ……。それで、苛めに発展しちゃって……。ほんつと、バカみたいな理由だけだね……。」

「……苛められていて……。苛められている理由が……。髪の色か……。まるで同じだな……。今朝の夢と……。そう思いつつも、俺には驚いた感覚が自分ではしなかった……。何故だろうか？

「誰も！……誰も……。助けてくれなかった……。みんな……。みんな……。みんな……。みんな……。みんな……。見てみないフリ！本当に怖かった……。寂しかった！」

百合亜が泣き出しそうな勢いで言葉を吐く……。

「でも、ある時、ある人が……。私がいじめられて泣いているところにやってきて、私が泣いている理由を尋ねて来たの……。『苛められてる』って話したら……。『どうしてだい？』って聞かれて……。私の黒髪のせいだって言ったら……。なんていったと思う？」

「その人は、こう言ってくれたの……。『俺は綺麗だと思うよ？』……。……って……。」

その言葉を嬉しそうに、大切そうに、百合亜は言う……。

「……初めてだった！初めて髪の色を褒めて貰えたの！その時はとっても嬉しかったわ！……。施設の他の子達は『変な髪色！』とか『ゴキブリみたいで気持ち悪いんだよ！』って言われてたのよ？……。私は自分の髪の色を恨んだわ……。なんで他の人と同じような髪色じゃないんだろう？なんでわたしだけ？」

て思っていたわ……。」

「でも……私はその言葉に半信半疑だったの……だから……
『本当？』って聞き返してみたの……そしたら……『本当さ
！』って満面の笑みで返してくれたの！」

本当に嬉しそうに語る……当時の彼女の嬉しそうな顔が目には浮か
びそうなほどに……。

「本当に嬉しかった！夢みたいだった！……他の人に心の底から
髪について褒められるなんて……想像なんかしたこと無かった！」

「それから、その人といつでも一緒に行動するようになったわ……
もう、髪の色なんか気にならなくなった……だって、綺麗で美しい
って言ってくれる人が傍にいるんですもの！そしたら、いつのまに
か……寂しさも、怖さも全くなくなっていったの！」

百合亜は自信と嬉しさが混ざったような、満たされたような声でそ
ういう……。

「その人は本当に優しい人だった……実は、最初に会った時も、
私のために私を苛めてた男の子と喧嘩してくれてたの……額に傷
があつて、尋ねたら、そう返してきたのよ……。」

「それだけじゃなかった！……その人はいつも、私の傍に居てく
れて、いつも私を手伝ってくれてたの……例えば……私って子
供の頃から身長が低かったの……その人は割りと高い方で……
私が取れないものを取ってくれたりした……嬉しかったけど……
正直にお礼を言うのが恥ずかしくて……いつもお礼を言う前に怒
ってしまつてたわ……でも、そんな事をその人は気にせず失笑
しながら受け止めてくれたわ……。」

「私にはそんなその人が輝いて見えたの……彼の銀色の髪も相ま
つてかしら？」

尋ねたような感覚で言うが……すぐに、

「違うわ……。」

と首を横に振つた……。ツインテールもどきが揺れる……。

「私には、彼が素敵な人に見えたの！とてもとても！かつこ

よく見えたの！」

まるで恋する女の子のような声だ……。いや、実際、恋をしてたのかな？解らないが……。

「とつても幸せだった！いつも彼の安心感に包まれてて、まるでおにいちゃんみたいな人だった……。これが家族なんじゃないかな？これがいつまでも続いたら！……って……。私は彼を頼りにしてたの……。」

そこまでだんだん早口で言い切ると、百合亜はいきなりしゅんとした……。

「でも……。でも……。それはいつまでも続かなかった……。」「声の調子が下がる……。とても悲しそうだ……。」

「突然……。彼が私に冷たくなつたの……。私はショックだった……。苛められても彼は助けてくれなくなつたの……。」

「だから、私は彼の好きな場所……。ここで、彼に私を助けてくれなくなつた理由を聞いてみたの……。」

「そしたら……。『俺はここから居なくなるから……。君に強くなくて欲しかった……。』って言われたの……。そんなの知るわけ無いじゃない！言わなきゃ、解らないわよ！」

泣きながらそう呟く……。俺のことではないはずなのに……。心がズキズキと痛む……。切なさばかりが募ってくる……。こんなに感情移入しやすかったか？俺って……。

「その時は……。本当に悲しかった……。また、独りになつちやうのか……。また苛められ続けるのか……。って思つて……。本当に大泣きして……。彼に酷いことをしちゃつた……。」

百合亜が残念そうな……後悔をしてるかのような顔で言う……。

「その後、彼とは話す機会が無くなって……。彼は行ってしまったのよ……。」

彼は何もしなかつたのだらうか？俺の夢ではピンクの星型のアクセサリーが付いた髪留めを二つあげてたが……。やはり、夢とは違うのか？

「……でも、年が違うし、いつかは別れて……独りになる事は解ってたんだから……と思って……私は彼が居なくなつてから苛められても泣かないことにした……苛められても……堂々とする事にしたのよ……。それに、何でも自分でできるように頑張った……取れないものは何か物を利用して取ったりなんかしてね……。そうしたら……いじめっ子たちはもう何もしなくなったのよ……。」

「そうして何年か施設で過ごしてる内に、ある日……私と同じような境遇な子と出会ったの……その子はね……とつても頑張り屋さんで……ほんつとに……何でも頑張る子で……結局、割と何でもできる子なんだけど……あることが理由で……大人からも子供からも恐れられてたの……みんな上辺だけ作つて……彼女とは接触しようと思わなかったのよ……。」

「本人もそれが解つてたから……彼女も周りを避けてたの……。」

「彼女もまた……孤独だったの……だから、私は彼と同じように、彼女の為に一緒に居てあげようと思つて近付いた……。」

「けれど……最初はずつと拒否されてたの……『私に近付いたら危ないから……』って……。でも、私はあきらめなかった……。私が幸せだった時の感覚を……彼女にも感じて欲しかった!」

心底そう思つていたのだろう……声に力がこもつていた……。

「そうしたら……彼女は心を開いてくれたの!それから、私は彼女と行動するようになったのよ……彼女も楽しそうだったけど……私も楽しかった!まるで、本当の姉妹みたいだったのよ!」

百合亜が嬉しそうに語る……。本当に嬉々としている……。だが……

「彼女に人と一緒にいる楽しさを知つて欲しかったんだけど……本当は私が寂しかっただけかもね……。」

とすぐに自嘲した……。

「でも、本当に楽しかった!彼がいなくても寂しくなくらい!」

ちよつと残念な気持ちに陥る……さつきから何なんだろうか?……この感覚は……。

「だから、施設を出た後……必死になつて勉強して……手に職を付けて……彼女を迎えに行つたの……家族を迎えに行くために!」

彼女は誇らしそうだった。

「そしたら…彼女は『もう一人お願いしても良い？』って頼んできたの…勿論断らなかつたのよ？だって…家族は多い方が楽しいじゃない！」

「そしたら、そのもう一人の子は、とても恥ずかしがり屋さんで…同時に変な子だった…でも、打ち解けてみるととても可愛い子だったのよ！」

「私はこの子供を守るために頑張った！必死で働いた！だって…一緒にいるのが楽しかったんですもの！」

百合亜は楽しそうに…誇りであるかのように続ける。しかし、それも長くは続かない…。

「でも、私の給料じゃ…養っていくのは難しかった…。」

彼女の顔が曇り始める…。確かに、たかが20代そこの人間の給料では、自分を養うだけで精一杯の筈である…。片や、富豪が遊んで生きてる中、百合亜のように家族と生活するのでさえ、ままならない人間もいる…。やれやれ…。理不尽な世の中で…反吐が出そうだ…。

「結局、借金まみれになって…借金取りに脅されるわ…近所の人に迷惑がられるわ…。外に出たら危ないから学校以外では二人とも外に出れないわ…。で…。二人に辛い思いをさせたの…まだ、親戚に預けてた方が良かったんじゃないのか？って思うくらい…。」

百合亜の顔が苦しみに変わる…。それはそうだ…。幸せにしようと思気込んでいたのに…。上手く行かない…。どうしようもできない…。そんな人間が考えることとは…。

「結局、私は何もできない人間だったの…会社の人間にはウザがられるし…あなたには、処女だからって子ども扱いされるし…二人には辛い思いをさせるし…しまいには、会社を辞めさせられちゃうし…。再就職しようとしても…全部断られちゃうし…。」

…あの時、ホテルに入らなかつたのは…俺の主義として…初めて位、

好きな人と…して…幸せを感じてほしいからだが…まあ、伏せておこう…。

「……………」

百合亜の言葉が止まる。目に涙が溜まっている…。それを見て…。俺の胸が苦しくなる…。俺の「良き理想に向かつて生きてる人が負けそうに成ってるのは悲しい。」と言う感情とは他に…。なにか違う感情が溢れて来る感じがする…。

「うっ…く…ひっ…く…。」

百合亜が泣き出す…。そして…

「元々無理だったのよ！私なんかにできっこなかったの！こんな…こんな…私なんかに！元々、施設でもいじめられっ子で…。何にもできなかつた私に！瑠璃にさえも劣る私に！…。瑠璃や白粉とで幸せになれるなんて夢や理想だったのよ！」

泣きながらそう言う…。

「そうよ！無理だったのよ！バカなのよ！私……………」

…。たった一人で何夢見てんの！まるつきりダメじゃない！誰一人、幸せにできないじゃない！瑠璃にはアルバイトをさせる羽目になるし、白粉には新聞配達…。家族だけじゃない…。あなたを利用しようとしてもしてるし！みんなに苦労をかけてばっかじゃない！本当に何がしたいの！」

「私なんか！私なんか…。」

彼女が悲痛に叫んでいる…。自分を責めている…。そして、この流れ…次の言葉だけは聞きたくなかった…。それは彼女が完璧に人生に負けてしまった証拠だ…。誰でも絶対にある…。そう思うことが…。そして、重みに耐え切れなくなった人の言葉…。そんな言葉は百合亜から聞きたくなかった…。でも、そんな事はお構いなしに、百合亜は次の言葉を叫ぶ…。

「居なくなればいいのよ…！」

ザッ！

その言葉を聞いた瞬間…俺は立ち上がる、そして、百合亜に向き直

り…力の限り叫ぶ……。

「そんな事は無い!!!絶対に!!!」

「瑠璃や白粉たちは君を必要としているんだぞ!」

そう百合亜に言葉を投げかける…そんな事は言わないで欲しい!もつと幸せにならなければいけないんだ!百合亜みたいな人たちほど…だから、俺は応援しようと思った!信じてみようと思った!。しかし、そんな思いもむなしく、

「だったら!これ以上どうしろって言うのよ!私はもう…二人を養えないのよ!」

百合亜が首を左右に激しく振ってあつさり拒否する…。二人を養えない?だったら!一つだけ方法がある!

「大丈夫だ!俺の会社が雇ってくれる!君の才能はすばらしいんだ!俺の会社でヘッドハンティングされるほどに!」

事実、ヘッドハンティングされるくらいだから…才能だけはある…才能だけは…でも、それだけではどうにもならないものがある…百合亜の性格が引き起こす…人間関係だ…。だが、そんなものは今からどうにかすれば…。どうとでもなる!もう一度チャンスがあるのだ!

「そんなの解ってるわよ!!!」

百合亜が立ち上がり、俺に向かって反論する…。

「でも!新しいところに行った所で!また人間関係が悪くなって、すぐにやめさせられちゃうわよ!面接官もそう言ってたもの!こんな最低な人間なんて!」

百合亜の性格上、人間関係は厳しくなるかも知れない…。百合亜は基本的に人を信用しないし…。信頼もしない…。そして、自分の非をあまり認めたがらない…。プライドから来る物だろう…。そうなれば自ずと衝突が起こる…。だが…だからと言って諦める訳には行かない…ここで諦めたら…。この家族は消滅してしまう!そんなこと…。瑠璃や白粉は望まないはずだ!この家族だけは絶対に救いたい!

「でも、努力すれば！」

そう言っただけで励まそうとするが…。

「もう無理よ！限界なのよ！」

百合亜が頭を左右に振り、否定する…。俺はすかさず…。

「やってみなければわからないじゃないか！」

と励ましに掛かるが…。

「あなたに何がわかるのよ！瑠璃や白粉のように私のことを知らないくせに！」

更に否定される…。確かに、俺は瑠璃や白粉とは違い…。百合亜と知り合ってから日数は経ってない…。百合亜は何が好きで何が嫌いなのかはつきりはわからない…。でも！そう思い、次の言葉を出そうとした瞬間…。

「……………家族でも無いくせに！！何がわかるのよ！」

思いつきり否定され、涙ながら叫ばれた…。

「……………。」

絶句してしまう、確かに、俺は家族ではない…俺は百合亜とは飲み友達だけだ…。例え、俺が支援したくても…。応援したくても…。俺の思いがどうであつても…。百合亜の事を深く知らないし…。楽しい日々を一緒に過ごしたわけでもない…。百合亜にとつて、家族ではない…。そんな俺が何を言っただけ…。どうにもならないのだ…。そんなことは最初から解っていた筈なのに…。そして、他人である俺は、百合亜をもう一度生きることには立ち向かわせる…。いい言葉も思いつかない。このまま、百合亜達は消えていってしまうのか…。もう言葉が出なくなって…。地面を向いてしまう。そんな俺を見て、百合亜は

「う……………うわああああああーん！」

まるで夢の中の少女と同じように声を上げて泣き出してしまった…。

「……………。」

どうすればいいか解らず…百合亜の方を見る…。

ふと、ツインテールもどきの髪留めが目についた……。二つの髪

留めのアクセサリーはピンクの星型をしていた……。
星型？

ドクンッ！

「うつ……くう!?!」

そう思った瞬間、心臓が早鐘を打ち、視界がかすむ……。俺はまた、フラッシュバックに襲われる……。目の前で泣いている百合亜が……。今朝の夢の中で泣いていた女の子と重なる……。胸が苦しい……。。

守ると言ったのに……。守るといったのに!……。俺は! (僕は!) この女性を (百合亜を!) 守ることすらできないのか! (守ることすらできないのか!)

ビリリッ! スーツ、カッチ!

頭に稲妻のような感覚が走り、そして、歯車がゆっくり音を立てて・動き出す……。記憶が……。繋がる! 先ほどまで、自分の感情じやないと……。まるで他人のような感情だった物と……。自分の感覚が! そして……。思い出す……。いや、取り戻す! 知識として頭によぎっていた物がつながり、自分が……。自分が百合亜の思い出の中に居る……。彼という人物だという感覚であると! そして、目の前で泣いている女性は……。あの時、俺が助けて……。一緒に行動していた少女だと!

「うああああああーん……。」

ザッ! ザッ! ザッ!

百合亜は泣いている……。あの時と同じように……。寂しさ……。怖さ……。そして、あの時には無かった絶望感を抱いて。俺にはあの時と同じように、助けを求めているように見えた……。誰かに頼りたいかのように……。いや、多分そうだろう……。

「相変わらず……。綺麗で美しい髪だな……。」

そっぴいなながら、泣いている百合亜の頭を右手で撫でる……。愛おしく……。

「あの時と変わらない美しさだ……。」

懐かしくて・・・愛おしくて・・・もう一度会いたくて・・・そして、あつてもう一度傍にいて、守ってあげたくて・・・。

「・・・えっ?・・・ぐす・・・ひっく・・・くすん・・・。」

「な...に...を...いつてる...の?」

涙声で百合亜が不思議そうに聞く・・・。

「俺があげた髪留め・・・大切にしてくれてたんだね?弾かれた時はちょっと悲しかったけど・・・良かったよ・・・使ってくれて嬉しいな。」

そう笑顔で言う、あの時・・・百合亜の髪を褒めたときと同じように・・・。その言葉を聞いた瞬間、百合亜は驚いたように目を見開き・・・

「え?ま・・・まさか!?...でも・・・あなたの・・・髪の毛の色が違うし・・・。」
と言う。

「いや、良くは解らんが・・・中学に上がって・・・しばらくしたら黒髪になってたんだ・・・。」

頭の後ろを掻きながらそう答えると・・・。

「でも!」

百合亜が続けようとする・・・。しょうがない・・・。

「・・・疑りぶかいなあ・・・そういえば・・・百合亜はここに来てはいつも寝てたっけ?俺の肩に寄りかかって・・・寝てるよきの百合亜は天使みたいなのに・・・起きたら、怒られてたっけ?」

実は・・・百合亜はここ(砂浜)に来るたびに・・・静かだからか・・・一緒に海を眺めてるうちに隣で寝てしまうことが多いのだ・・・。それを俺が意地悪そうに言うと・・・。

「あつ・・・~~~~~~~~っ!?!?」

百合亜の顔が真っ赤に変わり・・・

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさい~~~~い!~!!~!!」

と言って、俺に両腕を振り回しながら、ポカッポカッ　と殴ってきた・・・。

「あいててて……。」
実際、そこまで痛くないが……まあ一応言っておく……。そして次の瞬間……。

トンッ！
と百合亜は俺に抱きついてきて……。

「なんで早く来なかったのよ！ケイ兄の馬鹿！！辛かったんだから！寂しかったんだから！心細かったんだから！！！」

とまた泣きながら抗議する。俺は抱きしめながら……。

「いや、うん、ちょっと、記憶が飛んでね……喧嘩のせいでは……。」

最後らへんは聞こえないように呟く……。恥ずかしい……。とは言え……百合亜と過ごした日々と、中学でどうして記憶喪失になったのか？と言う理由しか思い出せてないが……。

「うわあああああああー！ーん！」

また百合亜が大声で泣く……。俺の腕の中で……。

夜が明けてきた……。周りは明るくなりつつある……。ここに着てから大分経つたのだろう……。何時間いたのかな？そう思っていると……。

「……ふんっ！」
パツ！

思いつきり泣いて気が済んだのか、顔が赤いまま百合亜が俺から離れる……。恥ずかしいのか？相変わらずだな……。

「それで？ケイ兄はちゃんと助けてくれるのよね？」

「私が困ってるんだから！」

そっぽを向きながら、そう尋ねてくる……。

「ああ、まあ、取りあえず……。俺の会社に来れるようにしてみるさ……。まあ、俺とは違う部署で……。経営部だけどね……。」
俺がそう答えると……。百合亜が不安そうに、

「で……。でも……。また、クビにされちゃうかも……。」

そう尋ねてくる……。

「だったら、クビにされないように頑張ればいいじゃないか！今まで頑張れたんだから……。」

俺がなんでもないような感じで言うと、

「そんなんだつたら苦労しないわよ！」

と怒られるが……。俺はかまわず、

「大丈夫！俺が居るからさ！俺が、クビにされないように人との付き合い方を教えるから！」

と満面の笑みで言う。まあ、俺も人付き合いは上手い方ではないが……クビにされない程度の社会人としてのマナーは身に付けてるつもりだ……それを少しづつ教えていけば問題ないだろう……多分……。

「そ……そんなの余計なお世話よ！……ケイ兄から教わるなんて……。」

腕を組んでまたそっぽを向き、顔を赤くして抗議する百合亜だが……。

「クビにされたいのか？」

俺は真面目な顔でそう問い詰める……すると、

「ううう~~~~~」

腕を組んだ両肘を強く握り締め、顔は赤いまま下を向きながら、唸っていた……が、

「わ……わかったわよ！教えてもらってあげるわよ！……べ……別に……人付き合いを良くするためであつて……ケイ兄のためじゃないからね！」

と顔を真っ赤にして言う……了承してくれた……。

「ああ……わかつてるよ。」

とりあえず、了承してくれたので……安心だ……俺は苦笑しながらそう返す。そして、

「さてと……じゃあ、帰るとしますか！」

と百合亜を促す。しかし、百合亜は……。

「え？・・・帰るって・・・どこに？」
と聞き返してくる・・・。

「どこ？って・・・瑠璃達の居るところに・・・だろ？」

俺がなんでもないうように答えると・・・。

「でも、仕事もなくなつて・・・借金まみれになつちやつて・・・アパートを追い出されて・・・そんな状態で二人を置いて飛び出しちゃつたし・・・合わせる顔が無いわよ・・・。」

と百合亜は自信無さそうに答える・・・。

「仕事は見つかつただろ？借金は今から返していけばいいさ！それに・・・二人は百合亜が飛び出したことは気にしてないさ！ほら！」
そう言つて俺が指で示した先には、瑠璃と白粉と隆平が居た。

「あ・・・。」

百合亜がそれを見て、声を漏らす・・・そして、あちらも気づいたようだ・・・俺たちを待っている・・・。

「さあ！行こうか！」

俺が百合亜にそう声を掛けると・・・

「うん・・・うん！」

と涙を流しながら頷き答えた。俺たち二人は、瑠璃達のほうに向かつて共に歩き出した・・・。

砂浜に足跡が付いていく・・・希望の足跡だ・・・百合亜たちがもう一度幸せになるための軌跡なのだ・・・。欲を言えば・・・俺もその中に入れればいいなあ・・・と思つたことは内緒だ・・・。

「お姉ちゃん！」

そう涙声で叫びながら百合亜に瑠璃が抱きついた・・・それと共に、白粉も百合亜の近くによる・・・。

「ごめんね・・・瑠璃・・・白粉・・・ごめんね・・・。」

百合亜が瑠璃を抱きしめながらそう呟く・・・。(ちなみに、身長は百合亜の方が小さい上、百合亜は子供っぽいので・・・瑠璃がお

姉ちゃんと呼ぶのは・・・どうしても違和感が拭えないが・・・
まあ、ここは黙っておこう。」

「うん！お姉ちゃんは悪くないよ・・・お姉ちゃんの気持ちに気づいてあげられなかった、私たちのせいだよ・・・。」

瑠璃は涙を流し首を振りながら、そう返す。白粉も涙を流しながら頷き、その言葉に賛同する。俺が一步引いて、

「良かった、良かった・・・。」

と呟いてると・・・横から、

「ああ、そうだな・・・。」

と不貞腐れた様な顔で隆平が同意する・・・。左のほっぺが赤く腫れていた・・・。

「どうしたんだ・・・それ？」

と隆平にほっぺの事を聞くと・・・。

「うるさい！おっさんには関係ないだろ！」

と不機嫌そうに怒られた・・・まあ、いいか・・・。

「ありがとうございます・・・啓志さん！」

瑠璃がいつの間にか、百合亜から離れて・・・こちらにペコリッとお辞儀をしてきた。

「ああ・・・どういたしまして・・・じゃあ、車のところまで戻って、とりあえずは帰るか！」

俺がそう答えると、

「はい！」

「ふんっ！」

「うん！」

こくこくっ・・・。

とそれぞれ同意の反応を示した・・・。そして、俺たちは『施設』に止めてある車に向かった。（まあ、隆平は不貞腐れた返事をしたのだが・・・。）

瑠璃と言い、百合亜といい・・・この施設の近くに来るとあまりいい顔をしない・・・。

「どうしたんだ？体調が悪いのか？」

百合亜が『施設』を見上げ・・・苦しそうな顔をしているので・・・聞いてみた・・・。

「ケイ兄は何も思わないの？この『施設』に・・・。」

『施設』を見上げたままそう尋ねて来る・・・。俺は

「まあ、うん・・・百合亜との思い出があるから、懐かしくはあるけど・・・そうだな、何か不気味な物を感じるな・・・。」

と答えた・・・。百合亜は俺の方に顔を向けて

「覚えてないの！？この『施設』の事？」

ビックリしたように聞かれる・・・。何を言っているのだろうか・・・。

「・・・何の事だ？」

何を言っているのかさっぱり解らないので聞き返してみる。しかし、「覚えてないのね・・・それならそのほうがいいと思うよ・・・ケイ兄・・・あれは過去のことだから・・・。」

百合亜は寂しそうに・・・だけど、同時に本当にその方が良いかの如く言つと車に乗った・・・。

「うん。」

俺は『施設』を見上げて・・・考え込む・・・『施設』は確かに不気味だ・・・それ以外に何かあるのだろうか？

「おっさん！早く乗って車出せよ！」

隆平にそう言われて俺は我に帰る。

「あ、ああ・・・。」

俺はそう言つて、いそいそと車に乗り、エンジンをかけた・・・。そして・・・車を発進させ・・・『施設』を出て・・・海岸線に出る・・・。

ければ使えるよ?」

俺がそう説明をすると……。百合亜と瑠璃、白粉は考え込む……。

「はっ!そんな馬鹿馬鹿しい……。こんな、おっさんのマンションに寝泊りするなんて自らのみを危険にさらすようなこと……」

と隆平が呆れ混じり答える……。まあ、確かに独り暮らしの男のマンションに女性が寝泊りするなんて、明らかに危険である……。隆平の言葉を聞きながらそう考えてると、その言葉を遮るかのごとく、次の言葉が百合亜から出た。

「……。私は……。ケイ兄がどうしても!って言うんだったら、同居してあげてもいいわよ!」

そんな言葉に「ええ!?!」と隆平が驚く。ふむ、ならば、

「じゃあ、心配だから……。君たちを守りたいから……。どうしても……。」

と俺は言葉を添える。すると……

「ふん!しょうがないわね!」

そう言って、照れ隠しか……。窓の外を見るフリをする百合亜だった。

「啓志さんなら……。いいかな……。?」

今度は瑠璃がそう答えだす……。またも隆平が「ええええ!?!?ちよっ……。」と言いかけたが……。

「だって、啓志さんは悪い人じゃ無さそうだし、それにお姉ちゃんを探すために一生懸命になってくれたし……。お姉ちゃんを説得して戻ってきてくれたもの!私は信じるわ!」

そう瑠璃が言い切る……。それを聞いた白粉も……。

「わ……。わたし……。も……。2人が良いなら……。良い……。よ?……。」

とオズオズと手を上げて同意してくれた……。拍子抜けだ……。ここまであっさり信用される物か?まあ、百合亜はともかくとして……。

「おいおい、みんな・・・ちょっと待つてくれよ。こんな、知り合
つてから何日も経つてないおっさんの所で寝泊りするのかよ!? 危
険過ぎやしないか?! 信じるのは早くないか!?!」

もつともな事を隆平が口にする・・・確かにそうだ・・・俺が百合
亜を助けたのだって・・・下手をすれば・・・単に気を引くためだ
けって可能性もあるのに・・・。

「そんな事はないわよ! ケイ兄は信用できる人に決まつてるじゃな
い! 私の恩人なんだから!」

百合亜が隆平にそう反論する。いや、恩人だからって主張は良く解
らないが・・・。

「いやいや・・・百合亜さん・・・良く考えてください・・・ん?
そういえば・・・さつきから気になってたんですが・・・ケイ兄つ
てなんですか? 百合亜さん」

そう呆れ顔で思考を促そうとしていた、隆平が疑問顔に変わる・・・
。そして、その言葉に反応して「あ、私も気になってた・・・。」
と瑠璃も興味津々になる。

「ケイ兄はケイ兄よ!」

当然のごとくそう返す百合亜だが・・・説明になつてはるはずが無く
・・・。

「いやいや・・・だから、ケイ兄って誰のことです?」

隆平が再度聞き返す。

「それは、もちろん、私の隣に座つて運転してる人のことよ!」

百合亜がまたも当然のようにそう言い返す・・・。説明になつてな
いというのに・・・。

「・・・ええ!?!」

そう隆平が驚く。当たり前だろうなあ・・・。しかし・・・。

「で、なんで啓志さんのことを、お姉ちゃんはケイ兄って呼んでる
の?」

瑠璃は驚いた様子も無く、真剣な表情で、更に百合亜が俺をケイ兄
と呼んでいる理由を追求してくる・・・。

「えっと、それは・・・前に瑠璃に話したわよね？瑠璃と会う前の私の話・・・。」

百合亜は瑠璃に確認しながら話を始める・・・。

「うん・・・お姉ちゃんは苛められてたんだよね？」

瑠璃は頷き促す。隆平は百合亜と瑠璃の二人の会話を真面目に聞いてるようで・・・静かだ。

「そう、そして、苛められてたときに、助けしてくれた男の子の話をしたよね？」

「うん・・・。」

「それが・・・この啓志さんだったの！」

そう言つて百合亜が話を締めくくる・・・。いや、俺、大したことしてないんだけどな・・・。ってか話が変わつてないか？

「そっか・・・やっぱり・・・。じゃあ、やっぱり・・・私じゃだめかな・・・。」

瑠璃はそう言つて、残念そうに下に顔を向ける・・・。私じゃだめつて・・・何がだ？・・・まあ、良いか・・・。

「うーん、確かに・・・それなら、百合亜さんが信頼するのも無理ないかあ・・・でも・・・本当に信頼するに足るのか？」

そう言つて隆平が俺を疑うような目で見ると・・・。

「学生で何にもできない隆平君よりは、何倍も信頼できるわよ！」

と百合亜に釘を刺され・・・黙りこんでしまった・・・。ふんむ、ならば・・・。

「じゃあ、えっと・・・全員一致つてことで・・・今日はマスターの家に送るから・・・明日から、一緒に俺の家の物置部屋の片づけを手伝つてくれるって事でいいかな？」

俺がそう三人に尋ねると・・・。

「し・・・仕方ないわね！明日は土日で休みだし・・・手伝つてあげるわよ！」

「私も今日は眠たいのでそれが良いです・・・。」

「・・・。」（コクコクと首を縦に2度振る）

と隆平以外は返事をくれたので・・・。

「じゃあ、そうだな・・・明日から・・・俺は家族の一員？って事で・・・宜しくかな？」

そう挨拶すると・・・。

「勿論よ！ケイ兄は家族も同然！」

「私はその方がとつても嬉しいです！」

「・・・。」（コクリと首を縦に振る）

と全肯定された・・・あっさり受け入れすぎだろう・・・と思つたものの・・・悪い気はしない・・・いや、寧ろなんだか嬉しい・・・何故だろうか・・・心が躍る・・・体がふわふわと軽い気がする・・・。

「よし！じゃあ、よろしくな・・・。」

そう言うと共に、俺はアクセルを少しだけ強く踏み・・・帰路を急ぎ始めていた。

会社と思いと海2 (後書き)

うーん、あんまり展開が良いとは言えないですね・・・もっと人を
考えなければ・・・はあ。

新居と借金とお買い物（前書き）

いやはや…都合が良すぎる展開ですが…うん、想像力の無さです。

新居と借金とお買い物

ピンポン……ピンポンピンポンピンポン！
ブーン！……ブーン！……ブーン！

「……うん？」

マンションの玄関のインターホンの音と携帯の鳴動音に起こされる……誰だ？

「ううむ……。」

「ごそごそ……ピッ！」

携帯を取り、通話状態にする……。

「はい、もしもし……嶋富ですが……。」

寝ぼけたまま適当に返事をする……。すると……。

「……何が『はい、もしもし……』よ！！！！今何時だと思ってるのよ！！！！」

「おおう！！！！？」

いきなりの大音声にびっくりして変な声が出てしまった。おかげで眼が覚めたが……なんともかつこ悪い……。

「えつと……百合亜か……。」

取りあえず……そう答えてベットから起き上がるが……その答え方が不味かったか……

「何が『えつと……百合亜か……』よ！ケイ兄！一体、何回電話したり、インターホン鳴らせば起きるのよ！私たちを何分待たせる気！？」

そのままの音量で更にそう続ける百合亜……うむ、今何時だ？俺はそう思い、部屋から出て、左の壁に立てかけてある時計に目を遣る……。

「！？」

12時を回っていた……。確か、俺は昨日、百合亜たちにこのマ

ンションに11時に来るように言ってた・・・1時間待たせたことになるのか？しまったな・・・。

「ああ、すまない・・・今開けるから・・・上がって来てくれ・・・。」

そう電話の向こうの百合亜に言いながら、ボタンを押してマンションの玄関のロックを開ける。

「全く！ケイ兄ってば！！！」

と言葉を吐きながら電話を切る、百合亜・・・聞こえてるんだが・・・。

ピッ！

百合亜が電話を切ったので、こちらも切る・・・見てみると、十数件近く百合亜からの不在着信があった・・・掛け過ぎだろ・・・いや、俺がいけないんだが・・・。

「ふう・・・。」

そう溜息をついて、俺は自分の服装を見る・・・ふむ、またもやスーツの上着を脱いだまま寝ていたらしい・・・シャツがヨレヨレだ・・・まあ、これで出迎えるのはだらしないが・・・いいか・・・。

ふと机に目を遣る・・・机にはノートパソコンが起動したまま放置されている・・・昨日、準備の為に使ったのをそのまま放置したらしい・・・。

「結局、寝た頃には7時過ぎてたな・・・。」

まあ、色々とやらなきゃいけないこともあって、ちょっと寝られなかったのだ・・・。

「ふあ~~~~、眠いな・・・。」

欠伸をしながら背伸びをする・・・さてと・・・そろそろ来るからしっかりしないと・・・。

ピンポン・・・。

今度はマンションの玄関ではなく、俺の部屋の玄関のインターホンが鳴り出す。どちらかというと、こちらの方が聞いた感じ、押しベル式のインターホンの音に近い。

「来たか・・・今、開けるよ！」

俺はそう呟いて玄関のドアに近付き、そして、ドアノブに手を掛け、扉を押して開ける。

ガチャツ・・・。

目の前には三人の女性が立っていた・・・。

真ん中が黒のスーツを着た百合亜・・・かなり不機嫌そうな顔をしている・・・そしてその右手には白い半そでの服にノースリーブ（袖なし）ワンピースを着ている瑠璃・・・なんか申し訳無さそうだ・・・。そして左手には白色の半そで服の上に灰色のノースリーブ（袖なし）ワンピースを着ている白粉・・・なんか、下を向いたまま顔を上げないな・・・。白粉の服はお下がりなのか・・・所々ボロボロだ・・・。

「・・・おはよう。」

不機嫌な百合亜が醸し出す・・・なんともいえない空気の中、そう挨拶する・・・。

「『おはよう！』じゃ、ないでしょ！何してたのよ！」

目を吊り上げ、第一声にそう言い出す百合亜・・・。これは・・・かなり怒ってるな・・・頭にお怒りマークが出そうなほど・・・。

「まさか・・・寝てたんじゃないでしょうね？」

ううむ・・・さっき電話に出たときも寝ぼけたような声で発言してたからなあ・・・これ以上は不味い・・・。

「・・・まあ、取りあえず中に入れてくれ・・・。」

と俺はそう言っつて、体を避ける・・・そうやって話題をそらす・・・。

「ふん！お邪魔します！！」

百合亜が不機嫌そうにそう言っつて俺の家に入る。

「お姉ちゃんがすみません！では、お邪魔しますね・・・？」

瑠璃が丁寧に頭を下げながら家に入る。良い子だな・・・。ペコリッ

と白粉も頭を下げながら瑠璃の後ろに付いて入る・・・。なんか顔

を合わせようとはしてくれない・・・悲しいな・・・。

「うっわ！広い・・・。ケイ兄っでお金持ち？」

リビングに入るなり・・・きよるきよると周りを見渡しながら、そんなことを言い出す、百合亜・・・。

「そんなわけあるかよ・・・。」

玄関を閉め、百合亜の傍に行き、そう返す。他の二人もビツクリした様な表情だ・・・白粉は大きな目を見開いてリビングの辺りを見つめてる。

「だって・・・こんな広いんだったら、普通そう思うでしょ！」

百合亜が戸惑ったような表情で抗議してくる・・・まあ、確かに、4人がけのテーブルを真ん中に置いて、更に部屋の端っこに大きめのテレビなんか置いてればそうも言われるか・・・。

「しかも、ベランダまであるし・・・。」

そう言っつて百合亜は勝手にベランダに出る・・・おいおい・・・。

「はあ・・・。」

それを確認した俺も溜息をつきながらベランダに出る。

サアアアア

風が気持ち良い・・・夏日に丁度良い風が吹き込んだ・・・。

「んん、気持ち良い~~~~。」

風を受けて、ご機嫌そうに百合亜が深呼吸している。俺はそんな百合亜の傍に行き

「・・・気に入ってもらえたかな？このベランダは・・・。」

と尋ねる・・・。すると百合亜は、笑顔で

「もちろん！」

と答えてくれた・・・。百合亜の黒い髪が風にたなびく・・・綺麗だ・・・そして、美しい・・・。そんな事よりも、この子が今、笑顔で気持ち良さそうにしているのがなんとも嬉しい・・・。

「ふふ・・・それは良かった・・・。」

そう言いながら、俺は口から小さな笑みをこぼし、百合亜と同じように遠くの方を見ていた。

ガラッ!

引き戸の開ける音がする……。しまった……。ちよつと世界に入ってしまった。……。

俺が音のした方向に向かって中に入っていこうとすると、百合亜も音に気づいてたからか……。同じように中に入ろうとした。

俺はそれを先に譲り、百合亜の後ろに続いて入って、音のした方を確認する。

どうやら、瑠璃が俺の寝室を開けたらしい……。瑠璃はどう反応しているのか戸惑っている様子だった。

「……物置?」

ボソツと百合亜が失礼な事を言う……。

「……俺の寝室だ……。」

ちよつとムカついた……。

「いや、でも、ほら、どう見ても……。物置でしょ!??」

確かに……。ベットの横に箆笥が有るわ……。箆笥を開けたらベットから起き上がれないわ……。で、かなり狭い……。家具を配置するときは、こっちが物置仕様な部屋なのはわかっていた……。だがある俺はこっちを選んだのだ。

「俺の寝室だ!」

ちよつと腹が立ったので、少々語勢に不機嫌さが出てしまったらしい……。百合亜が

「何よ!そんなに向きにならなくていいじゃない!ケイ兄のバカ!」
さっきまで機嫌が良かったのに……。目をまた吊り上げながら、そう言い返してくる。

「人の部屋を物置呼ばわりするんじゃない!そんな失礼なことを言うから人間関係が難しくなるんだろ?……。」
俺も負けじと応戦する。

「う……。うるさい!うるさい!うるさい!うるさい!うるさい!自

分が物置みたいな部屋で寝てるのが悪いんじゃない！」

痛いところを突かれたため、顔を真っ赤にしながら、百合亜は反論する……。やれやれ……。ここで一旦引いとくか……。

「何処で寝たって……。俺の勝手じゃないか……。」

俺はそう言って「はあ……。」と溜息をつく。

「じゃあ、物置って言っても良いじゃない！」

と止めを刺される……。

「うっ……。くう……。」

反論できなくて、俺より背が小さい、勝ち誇っている百合亜を睨みつけていると……。

「あの〜、啓志さん？」

と瑠璃が聞き辛そうに、尋ねてきたので、

「なんだ？」

と答えたら……。瑠璃に

「あ……。ごめんなさい！私が開けてしまったばかりに……。」と謝られてしまった……。どうやら、俺の言葉に棘があったらしい……。ここはとりあえず落ち着かねば……。

「いや、気にしなくて良いよ……。何れバレることだし。んで、どうしたんだい？」

確かに、どうせ、明日か明後日……。同居し始めたその日にはバレていた事である……。気にすることは無い。

「えっと……。すみません、私達が寝泊りする予定の部屋って言うのは何処なんですか？」

そう瑠璃が申し訳無さそうに言う……。悪いことをしたな……。ちやんと言わなきゃわかるはずなのだから……。それで、間違えて俺の部屋を開けたのか……。

「ああ……。ええ〜つと、それはだな……。」

そう言いながら俺は……。今開けた、俺の寝室とは反対の部屋の扉まで歩いて行き……。

「ここなんだよ……。」

と言う台詞と共に・・・ガラス！と引き戸を開ける・・・。と同時に
にブワツと埃が舞った・・・。息苦しい・・・。

「ゲホゲホ・・・。相変わらずこの部屋は埃っぽいな・・・。」

俺がそう咳き込みながら、三人の方に向き直ると・・・三人とも、
目が点になつてる上に・・・口がポカーンと開いていた・・・。

「どうしたんだ？」

俺がなんでもないうようにそう尋ねると・・・。

「『どうしたんだ？』・・・じゃないでしょ！何なのよ！これは！」

百合亜は俺が開けた部屋を指摘しながらそう言う・・・。

「何つて・・・部屋なんだが・・・。」

俺は当たり前だろ？とでも言うように答えるが・・・。

「これの何処が部屋なのよ！明らかに物置でしょ！」

百合亜が怒つて答える・・・それに同意するかのように、白粉は頷
いている・・・酷いなあ。まあ、確かに、物置と呼ばれてもおかし
くないのだが・・・。

「ああ・・・すまない・・・。そうなんだ・・・だから、掃除しな
きゃいけないくてな・・・。」

そう答えると・・・。

「どうしてこうなつたのよ！」

百合亜が指差す先には、所狭しと、筆筒やらテレビやら電子レンジ
やらの家具の類が一杯置いてあつた・・・。しかも、それら全て、
使われて無いので、白く埃を被つていた・・・。

「ああ、えつと・・・前のマンションから引越すときに家具を持
つてきたんだが・・・結局、上手く配置できないから、家具を一新
してね・・・それで、使わないからここにずっと置いてたんだよ・・・」

そう理由を説明すると・・・。

「なんで捨ててこつちに住まないのよ？こつちの方が広いし、住み
易いじゃない！」

と百合亜に返される・・・。

「いや、狭い方が落ち着くんだ……うん……。」

俺は頭を掻きながら答える。そんな俺を見つめて、

「変人？」

と百合亜が呟く……。おい……。

「変人って言わないでくれ……。」

自分でも解ってはいるが……人から言われるとなんだか気分が落ちる……。

「んで？今からこれを私達が掃除するわけ？」

百合亜が不服そうに尋ねてくる……。誰だってこんなのは片付けたくないからな……。俺だって嫌だ。

「ああ、そう言うことになるな……。まあ、今日のところ、俺は手伝えないんだが……。」

俺のそんな発言に百合亜と瑠璃と白粉の三人は驚いたようにして、

「なんでよ!？」

「なんでですか!？」

「……!？」

それぞれの反応を見せる……。そんなに驚かれてもなあ……。

「いや、昼から仕事だから……。」

俺が当然のごとくそう言つと……。瑠璃と白粉は納得したようだが……。

「ちょ!？何それ無責任じゃない!？しかも、今日は土曜日なのに!？」

と百合亜に指摘される……。まあ、確かに、でも仕事だからな……。

……。それに、

「休日出勤なのさ……。それに、百合亜も来るんだぞ？」

「え？」

俺の台詞を聞いて、百合亜は停止する……。ふむ、解る訳ないよな……。

「上司も会社にいるから……。今日の内に面接も済ませて、月曜日から働けるようにしよう」と思ってたね……。」

俺がそう説明をすると・・・今度は意外といった感じで

「ええ！？でも、まだ、私がケイ兄の会社に勤めるって話はしてないんじゃない？」

百合亜がそう尋ねてくる。

「ああ、それなら今朝？だったか？・・・の7時前後に確認の連絡をしたよ・・・OKだつてさ・・・」

俺は問題ないとも言わんばかりにそう言う・・・今朝方7時ごろに寝たのはその為だ・・・そして、

「そうですか・・・だから、お姉ちゃんだけスーツで来いって言うてたんですね・・・」

瑠璃が俺の意図を汲み取り、そう締めくくってくれる・・・確かに、昨日、俺は百合亜にスーツで来いと言っていた・・・まあ、半分忘れてたが・・・瑠璃の言葉で、百合亜も納得したようだった。

「そう言うわけだから・・・瑠璃ちゃんに、白粉ちゃん・・・掃除よろしくね！適当に捨ててもいいから・・・それで、俺は百合亜をつれて会社に行つて来るから・・・」

そう言つて瑠璃に挨拶すると、

「わかりました！ちゃんと月曜日までに住むことができるように掃除しておきますね！」

と笑顔で俺に対し軽い敬礼をしたてくれた・・・そして、その隣で白粉も頷く。うんむ、いい子達だ・・・。

「頼んだよ！」

そう言つて、俺は瑠璃と白粉の頭に手をやるうとするが・・・。

「あつ・・・」
「スツ・・・」

と瑠璃は少し驚いたように声をあげ、白粉には避けられる・・・やはり、まだ警戒されてるのかな？寂しいものだ・・・まあ、気にせず瑠璃の頭に置いた手を左右に動かし、頭を撫でる。

「えへへ・・・」

瑠璃が本当に嬉しそうに笑う・・・可愛い奴だ・・・そんな可愛い

い笑顔を見てたら・・・もつと撫でていたくなるな・・・。
なでなで・・・。

「えへへへへ・・・。」
本当に嬉しそうに笑うな・・・もつと見たくてもつと撫でたくなる
な・・・。ううくむ。

「ううくくく。」

その光景を見た百合亜がうなっている、どうしたんだろう？

「どうしたんだ？」

解らないので撫でるのを止めて、そのまま聞いてみるが・・・。

「知らない！ケイ兄のバカ！」

「それより、さっさと会社に連れてってよ！」

と思いつきり怒られた・・・。何故だ？・・・。ああ、いや、そ
うか・・・。

「そうだな、じゃあ、上着を着て、車の鍵を持ってくるから、ちょ
っと待っていてくれ・・・。」

そう言って、俺は瑠璃の頭から手を離し（ちなみに瑠璃は百合亜が
唸っていた時点ではつの悪そうな顔をしていた・・・。）・・・自
分の寝室へ向かう。

「ふんっ！」

百合亜がそっぽを向いた・・・ご機嫌斜めのご様子だ・・・。俺は
それを気にせず、寝室で上着を着て、車の鍵を持ち、リビングに戻
ってきた・・・。さてさて・・・。

「じゃあ、行こうか・・・百合亜。」

そう百合亜に声を掛けると・・・。

「ふんっ！先に駐車場に行ってるわよ！」

またもそっぽを向かれる・・・そして、そう言って、さっさと玄関
から出て行ってしまふ。仕方ないから俺もそれに遅れないように、
百合亜の後について、玄関から出ようとすると・・・。が一旦立ち止
まって、振り返り。

「じゃあ、行ってきますー！」

と出る前に瑠璃たちに出かける挨拶をする……。すると、

「はい、行ってらっしゃいです！」

そう言つて瑠璃と白粉は笑顔で見送つてくれた……。(白粉は無言で手を振つてただけだが……。)なんとなく、心が温かい気がする……。なぜだろう？

そんな気分になりながら、俺は玄関から出て行き、百合亜の後を追いかけて駐車場へ向かう……。

駐車場に置いてある俺の車に着いてからも百合亜は不機嫌そうだった……。まあ、当たり前か……。そんなにすぐ機嫌が直つたらおかしいよな。

「さてと……。じゃあ、行きますか！」

俺がそう百合亜に声を掛けて運転席に乗り込むと、

「ふんっ！」

と口を尖らせたまま、助手席に乗り込む百合亜……。本当に拗ねた子供みたいだな……。

車を発進させて、駐車場を抜け、住宅街を通り、会社に行くための道へ出る……。

しばらくして、俺は百合亜の方を見るが……。やはり、まだ少し不機嫌そうだ……。しかし、相変わらず発育の遅れてるとしか思えない程の身長だ、昔から周りの子達より小さかつたっけな？……。けれども、胸までとは……。

「?……。どうしたのよ？」

そんな俺の視線に気づき百合亜は怪訝そうに俺の顔を見る……。まずいな……。気づかれてしまうとは……。確実に身長とか胸の事を言つたら怒るだろうな……。

「いや……。成長してないなあ……。と思つてな……。」

俺は冷静なフリをして、気づかれた事の動揺をごまかそうとする……。

「……何が？」

聞き返されてしまった……。どうしようか……。よし。

「いや、性格とかの話だよ……。」

そう言っつて、逃げようとするが……。

「そう……そんなに変わってないのかな？」

「一生懸命頑張ってきたんだけどなあ……。」

と急にしゅん……。っとしてしまった……。間違ったか……。うう……。溜息まで吐いてる……。ああ、ええ……。そんな寂しそうな顔を作らせた訳じゃないのに……。

「い、いや……。違うんだ……。実はさっきのは嘘で……。」

俺は百合亜の寂しい顔に更に動揺して、さっき言った台詞を否定してしまう……。

「え？じゃあ、何なのよ？」

「いや……。それは……。」

ごまかすのに失敗して……。言葉に詰まる……。まずいなあ……。俺が答えるのを躊躇してるので、

「……えっと、さっきのケイ兄の視線は確かこの辺だったような……。」

と言っつて、百合亜はさっきの俺の視線を思い出しながら、視線の先を辿っているようだ……。足先から頭、そして、百合亜の視線は俺が最後に見た百合亜の胸に視線が行き着いた……。なんで、解るんだ？百合亜のやつ……。というか、かなりヤバイぞ……。この状況……。

「……。」

「……。」

無言が続く……。どうすればいい……。えっと……。

「今日は天気がいいなあ……。なあ、百合亜？」

苦し紛れの一言……。しかし……。

「ケイ兄……。どう思った？……。私について……。」

有無を言わさぬような雰囲気を漂わせて、俺に尋ねてくる……。

下手に嘘を吐くより、もう諦めて正直に話す方がいいか……。
「……えつと……相変わらずな身長……と同じように……
・胸も……小さいなあ……って……。」
言い辛い……途切れ途切れに言うしかないほど言い難い……。
そして、その言葉を聞いた百合亜は……。

「~~~~~っ!!!」

と顔を真っ赤にしてワナワナ震えながら、声にならないような怒りの唸りを上げていた……そして、次の瞬間、運転席と助手席の間においてある、ティッシュ箱を右手で掴み……。

「ケイ兄のバカー！、死んじゃええええ!!!」

と叫びながら俺に向かってティッシュ箱の角を何度も腕を振り上げてぶつけて来る……。

「痛い！痛い！……ちょ、落ち着け……落ち着くんだ……。」

角は真面目に痛い……冗談抜きで……しかも、今は止まっているから良い物だが、それでも、運転しているため、派手に避けることができない……。

「バカ！バカ！バカ！」

馬鹿と言う罵倒と共に百合亜は何度も俺をティッシュ箱で殴ってくる……。

「痛い！痛い！……ちょ……運転中だから危ないって！」

俺がそう言うと、百合亜はぜえーはぁーと肩で息をしながら、ティッシュ箱で殴るのを止めてくれた……助かった……。

「ふんっ！ケイ兄なんか死んじゃえ！」

そういつて百合亜は顔を真っ赤にしたまま、そっぽを向いてしまった……。やれやれ……。信号が青になったので、発車する。

「いやいや……えつと……でも、逆に安心したよ……あんまり変わってないからさ……俺の知ってる百合亜でさ……相変わらず、美しいし、可愛いし。」

これは俺の本心だ……実際、百合亜があまり変わっていないお蔭で、気楽に話せるし……なにより、元々、小さくて、いつも俺が助け

てあげると照れてる百合亜が可愛かったわけだしな……。そういえば、記憶が無くて……。初めて出会ったときも……。そんな風を感じたっけっか？まあ、秘密だが。

「ふ……。ふん！ケイ兄なんか知らない！」

満更でもない様な顔をするが、すぐにいじけたフリをする百合亜。

「こりゃ、しばらく口を利いてくれそうに無いかもな……。」

「……………」

「……………」

無言のまま走ること、数分……。機嫌が直ったのか……。百合亜が口を開いた……。

「ねえ？そういえばさあ……。気になってたんだけど……。」

「ケイ兄って……。何歳？」

「……。一番聞かれたくない質問なんだが……。」

「いや、だから、俺は前に言ったように……。30代前半って……。」

そうやって俺はごまかそうとするが……。

「いや、それ、おかしいわよ……。だって、私が7歳のときに、ケイ兄は出て行ったのよ？あそこは確か、中等教育はしてないから……。施設を出て行くのは、12歳のとき……。どう計算しても……。ケイ兄は今、私より5歳上の26歳のはずなんだけど……。」

百合亜が考察して、そう答えてくる……。ここまで見抜かれてたらなあ……。

「……………はあ。」

「そつだよ、俺は今、26だよ……。」

俺は諦めて答える……。歳なんか言いたくないのに……。

「え？でも、じゃあ、なんで30代って主張してるの？」

やっぱり、そうなるか……。なんで、そこまで追求してくるかなあ……。気にしなくていいじゃないか……。とも思うが……。まあ、当たり前とも思う……。

「……………」

しかし、答えたくないの、百合亜の質問に無言で返す……。すると、百合亜は

「もしかして……老け顔だから？」

と俺に聞いてきた……。それを一番言われなくなかったのだ……。

「……ああ！そうだよ！……俺は老け顔だから、30代つて言った方がしっくり来るだろ？」

不機嫌気味に俺は答える……。が、百合亜はそんなことも気にせず……

「ああ、なるほどね。」

とあっさり答える……。ぐぐぐつ……。百合亜め……。そんなあっさり言われると余計傷付くんだが……。はあ。俺は渋い系な顔……。言い換えると、要は老け顔の類な訳だ……。だから、年齢を詐称して女を口説いたりしてるんだが……。そういえば、しばらくしてないな……。まあ、いいか……。

「ねえ……。そういえばさあ……。ケイ兄……。あの時さあ……。私を連れ込もうとしたよね？」

百合亜がそんなことを言い出す……。あの時つて……。あの時か？

「あの時つて……。ああ……。えつと、そうだな。」

取り合えず……。肯定しておく……。連れ込もうとした時つてのは……。アレしかないが……。

「あの時、もし、私がOKしてたら……。してたの？」

そう言いながら百合亜が頬を赤くしながら、上目遣いで覗き込んでくる。百合亜の釣り目の日本人特有の茶色い瞳が俺を見つめる。つて……。なんで、そこで赤くなって、上目遣いで覗き込んでくる……。いや、解らんでもないが。

「ええ〜つと……。」

……。そんな事を答えられるわけもなく……。俺は逃げの一手を打つ。

「ああ！そういえば、百合亜！」

「へ!?!?・・・な・・・なに!?!?」

俺が急に大声を出して百合亜を呼ぶものだから、百合亜はさっきまでの表情がすっ飛び、きょとん!とした顔で、答える。

「多分、今日の内にある程度片付くだろうから、明日は日曜日だし、買い物に行かないか?色々揃えなきゃいけない物があるだろう?」
そう言つて無理やり話題を変える・・・。

「ええ・・・そうね、色々買う物あるから・・・明日は買い物しましょ!」

「もちろん!ケイ兄が付いてきて全部払ってくれるんでしょ?」

とさっきの話を忘れ、笑顔でご機嫌そうにこちらに聞いてくる・・・しかし、全部払つて・・・内容がエグくないか?

「ああ、どのくらいの量かはわからないが・・・とりあえず、今回は俺が払つとくよ・・・。」

まあ、百合亜が大量にお金を持つてるわけがないので、金銭的に多少きついかわからないが・・・俺は了承する。

「当たり前よ!でも、ケイ兄と買い物かあ・・・楽しみだなあ。」
百合亜の笑顔がより一層明るくなる・・・ご機嫌も良くなって、何とか回避できたらしい・・・良かった。

「ん・・・そろそろ会社に着くぞ?準備は良いか、百合亜?」

もうそろそろ会社に着くので、百合亜に心の準備をさせるために声を掛ける・・・。

「あ・・・うん。大丈夫・・・。」

それを聞いた百合亜は真面目モードに戻り・・・心の準備を整えたようだった・・・。

キーンツ!ピタツ

車を会社の駐車場に止める・・・社員用の駐車場は会社の横にある駐車場の一部のため、駐車場から、会社の正面入り口には歩いて行かなければならなかった・・・。

「さてと・・・行きますか・・・。」

俺は百合亜にその声を掛ける・・・。

「うん・・・。」

百合亜は顔を俯け、不安そうだ・・・そりゃそうだろうな・・・再就職を何個も受けて落ちたんだから・・・。

「大丈夫！百合亜の能力を高く買ってくれてるみたいだから・・・きつと、上手くいくさ！」

そう言つて、不安を少しでも取り除くために左手で百合亜の肩を叩く・・・確かに、かなり高く買つてる様だった・・・あのメールの内容だとね・・・実際はどうか解らないが・・・。

「うん・・・。」

百合亜はそう言つて、車を降りた。俺も続いて車から降りる・・・。そして、二人とも会社の正面入り口に向かつていく・・・。

大きなビルが目の前に建っている・・・俺が毎日通つてる会社だが・・・なんか・・・プレッシャーを感じる・・・まるで自分が面接に来たみたいだ・・・。

「はぁ・・・。」

百合亜が憂鬱そうに溜息を吐く・・・多分、このプレッシャーよりも百合亜の方がもっと重いプレッシャーを感じてるんだろうな・・・。

ふと、自分の腕時計を見る・・・12時40分だ・・・ふむ・・・。

「面接とかは・・・1時30分だから・・・食堂で昼食でも食べるか・・・行くぞ？百合亜？」

そう言つて俺は百合亜に声を掛けて中に入るのを促す・・・。取り敢えず、昼を食べよう・・・そうすれば少しは落ち着く・・・。訳は無いが、取り敢えずは気をそらさなければ・・・。

「え？うん・・・。」

不安な顔のまま百合亜が俺の後に続いて会社に入る……。

食堂に入り、食券を買い……。料理を受け取って、俺たちは向かい合って座る……。俺はAランチ……。焼き鯖に味噌汁とご飯が付いたセットだ。それに対し、百合亜は普通のうどんだけ……。いや、お金を貸そうとしたんだけど……。手持ちがなかったんだ……。俺がうどんにすると言ったんだが……。百合亜は『私がうどんでない！』と言って引かなかったので……。こうなったんだが……。どこからが百合亜の琴線に触れるラインか解らないなあ……。困った物だ……。

「本当にそれだけでよかったのか？」

念のために聞いておく……。っていうか、心配だ……。倒れるんじゃないのか？

「大丈夫よ！これ以上、ケイ兄に迷惑掛けないじゃない！」

と百合亜は怒り気味に言う……。なんで切れてるんだ？いや寧ろ、その理論だと、明日の買い物は俺が全額払うって約束とかはどうなるんだ？……。まあ、取り敢えず聞かないで置くか……。

「そうか……。」

そう言っただけ俺は自分の箸を手に取り、手を合わせる……。その俺の動作を見て、百合亜も手を合わせる……。

「いただきます……。」

二人同時に手を合わせたままそう言う……。うん、いいね……。この感じ。

もくもく……。もくもく……。ズズズー。ズズズー。

俺も百合亜も無言で食べる……。そういえば……。なんで、俺、昨日の夜（ほぼ朝だが）はしゃいでたんだろうな……。柄にもなく浮かれてアクセルを強く踏み込んでたし……。しかも、今朝から感じてる……。満ち足りた感覚……。充足感って言うのか？を感じてるみたいだし……。

まさか……。俺は三人と一緒に住めることを喜んでる？……。俺ってそんな寂しがりだったか？……。まあ、心当たりもない訳ではな

いが……。でも、ま、この感覚も……。

「嫌いじゃないな……。」

俺はつい、ボソツと……呟いてしまった……。その言葉に「ん？」

とうどんを嚙っていた百合亜は反応するが……。(うどんを銜えただまま目遣いな格好で可愛らしい……。)話すのも恥ずかしいので……。

「いや、なんでもない……。」「と誤魔化す……。」

「そう……。」

百合亜はそれ以上、追求してくる気配はなかった……。恐らく余裕がないのだろう……。面接で頭が精一杯なのだろうな……。そう思っていると、次に予想しない事を聞かれた……。

「ところで……。ケイ兄ってなんか罪有るの？」

「うぐっ!？」

ご飯が……。喉に!喉に!……。咄嗟に水を飲んで、詰まったご飯を流し込む……。

「ふう……。」

「……。ごめん……。ケイ兄……。」

百合亜は俺の反応を予想してなかったのか……。しょんぼりしてる。面接のことを考えてたんじゃなかったのかよ……。まあ、いいか……。しかし……。なんでそんな事を聞くんだけ?まあ、無い訳じゃないけど……。本当に何でだろうな……。聞いてみるか……。

「なんでそんな事を聞くんだけ？」

俺は率直に聞いてみる。すると、百合亜は

「いや、だって……。こないだ喧嘩がどうとか……。って聞いたから。だから、罪とか有るんだったら……。償うの手伝おうかなあ?って思つて……。」

と何でもないようにあっさりと言う……。こないだ……。って、海岸でのことか!?!ううむ、時折、百合亜は侮れないな……。あ

の言葉を聞いていたとは……。しかし……。罪まで発展するのは急じゃないか？ま、いいか……。それに……。罪があるのは確かだしな……。中学時代のアレのせいで。

「いや、手伝えるようなことじゃないから……。気にするな……。」

「でも！」

百合亜は必死そうな顔をして、聞きだそうとするが……。

「ところで、百合亜……。いくら借金があるんだ？」

と俺はまたもや話題を変えることで……。逃げの一手を打つ。

「……………」

「……………」

無言の圧力の掛け合い……。俺は意地でも言わない……。

「はぁ……。えつと……。ざつとこれだけよ！」

圧力の掛け合いに折れた百合亜が指を3本立てて借金の数字を示した。ふう、折れてくれて良かった。しかし……。なんだ200万か……。

「大したことないじゃないか？300万なんて……。」

うん、大した事なんかない……。俺ならすぐにも返せる金額だ……。しかし、百合亜は「え？」とでも言わんばかりに驚いた後、

「何言つてんのよ！3000万よ！3000万！」

と大声ではないが、そう俺に怒ってきた……。3000万って言ったよな？

「マジで……。3000万？」

確認のために、もう一度問う……。正直、間違いであつて欲しいが……。

「うん、3000万……。」

そんなに甘くはなかった……。

ありえない数値だ……。いくらなんでもそこまで……。何をしたんだ？

「瑠璃達と一緒に住み始めてから、何年くらいだ？」

単純に考えると3000万もの借金を生活費だけで使うには・・・
何年か掛かる・・・5年位か？

「えっと・・・1年経つか、経たないか？位だと思う。」

百合亜が少し考えながら答える・・・。1年そこらで3000万！
？有り得ないだろ！何故だ？

「一体どうして、3000万も？」

考えるよりは聞いたほうがいいだろう・・・。

「ええっと・・・その・・・瑠璃を養子に取るときに・・・相手方
の養親に・・・その・・・1500万ほど要求されて・・・。」

百合亜が小声で説明し辛そうに言う・・・。
・・・。
・・・。
養子にするのに、金銭要求か・・・軽い
人身売買だな・・・。
気分をぶち壊される・・・。

「それで？・・・払ったのか？その要求を呑んで・・・。」

俺は百合亜にそう聞き返す・・・。百合亜は一層しょんぼりとした
感じで

「うん・・・。」

と首を縦に振り、頷く。視線が下に落ちていた・・・。

「しかし、その養親も養親だが・・・百合亜も百合亜だ・・・人を
金で買うなんて・・・。」

確かに・・・医者とかヤクザとかの人身売買よりはマシかも知れな
いが・・・。あんまりいい気分じゃない、寧ろ、そんなのを認めた
くない・・・。そんな気持ちからか・・・俺は責めるようにそう百
合亜に向かって言う・・・。

「そ・・・そんなこと！言われなくたって解ってるわよ！・・・だ
って・・・だって、瑠璃が可哀想だったから！」

泣きそうに、目に涙を浮かべながらこちらに反論してくる・・・。
・・・。
百合亜も負い目を感じているようだ・・・あまり責めるべきじ
やなかったな・・・気をつけよう・・・。

「そんなに酷かったのか？瑠璃の養親？」

そこまで言うからには、恐らく百合亜自信が経験したことより酷い

か・・・同じくらいだったんだろう・・・。

「私が大人になって会いに行つたときに聞いた話なんだけど・・・表向きは、世話をしてる振りはしてたけど・・・家の中ではクズ呼ばわりされて・・・こき使われてたり、食事も粗末な物だったみたい・・・。」

百合亜が話し出す・・・。クズ呼ばわりは・・・まあ、良くあることだ・・・俺はキレかけたけどな・・・。しかし・・・食事までも粗末とは・・・どういう考えしてるんだ？

「でも、それだけじゃないの・・・あの子・・・養親に引き取られてから、身体が成長したから・・・あんまり、お酒強くないのに・・・其処の父親と瑠璃と同年代位の息子に大量にお酒を飲まされそうになったり・・・。」

・・・言わずもがな・・・恐らく、そう言うことを狙つたのだろう・・・話しぶりでは回避できたのだろうか？そうであつて欲しいが・・・。

「・・・どうにか回避できたのか？」

俺のその質問に百合亜は・・・。

「うん・・・なんとか、誤魔化して飲まなかつたみたい・・・。」と答えてくれた・・・良かった・・・。

「でも、それだけじゃないみたい・・・なんか・・・胸を触られたり・・・色々そう言うことをされたみたいで・・・養つてるからつて・・・。」

百合亜が続ける・・・なんて奴らだ・・・。人間の屑とまでは言っちゃいけないが・・・言いたくなるな・・・。

「でも、瑠璃は『養われてるんだからしょうがないもの・・・お姉ちゃん！会いにきてくれて、ありがとう！私頑張るから！』って寂しそうな笑顔で言ったのよ？・・・放つて置けるわけじゃないじゃない！」

涙こぼさないが悲しそうに語る百合亜・・・。

正直、想像以上だ・・・確かに・・・放つておけないな・・・記憶

を失つてた俺が百合亜たちを助けようとしたように、百合亜も瑠璃を助けたかったんだろう（百合亜の場合は知り合い・・・というか施設で仲が良かったから余計に助けたかったんだろうな・・・）

「確かに・・・それは放っておけないな・・・。」

「うん・・・。」

俺は相槌を打つ・・・そして、それに対して百合亜も同意し、気分を落ち着かせているようだ・・・。そうになると、瑠璃は他人に触られるのは嫌いなんじゃないのか？しかし、今朝方そんな感じはしなかったが・・・。

「俺、今朝方、瑠璃の頭を撫でたけど・・・辛くなかったのかな？」
百合亜に聞いてみる・・・。

「・・・それは・・・元々、私、施設であの子のことを可愛がってて・・・その時から、頭を撫でられるのは好きだったみたいよ？いつも私に良くしてくれて・・・まるで仔犬みたいだったわ・・・。」

そう答えられて、俺は安心する・・・瑠璃に辛い思いをさせてないのなら・・・良かった・・・。

「むむう～～。」

百合亜が頬を膨らませている・・・なんだ？

「どうした？」

「べっつに～～。」

そういつて百合亜はそっぽを向く・・・なんだなんだなんだ？

「どうしたんだよ？」

俺は再度聞く・・・。

「な～んか、一喜一憂してるからさあ～。」

と百合亜が答える・・・。顔に出たか？しかし・・・なんだ？いけないのか？・・・ああ・・・なるほど。

「いや、まあ、百合亜の大事な家族だからだよ？」

俺はそう答えるが・・・。

「・・・本当にそれだけ？」

百合亜はそう疑ってくる……。

「ああ……もちろん……それに彼女は良くできた子だからな・
・余計に心配になるのさ。」

良くできた子ほど……抑えてる物は強い……本当に大丈夫かな
？瑠璃は……いや、大丈夫ではないかもしれないが……。

「ふん！どうせ私は人とコミュニケーションをとれない、出来ない
人間ですよ！」

更に拗ねる百合亜……そんな百合亜に俺は

「……俺は好きだよ？百合亜のこと……。百合亜は確かに不出
来だけど……情熱的な部分があるから……出来ない分守ってあ
げたいと思うよ……。」

と言う。真実な気持ちである……恋愛対象かどうかは伏せておこ
う……。百合亜は驚いたような顔をし……。そして、顔を真っ赤
にしながら……

「……んで、後の1500万は利子とか生活費とかよ！」

と続ける……。俺はそれに対し、

「白粉のほうは引き取るのに何の問題もなかったのか？」
と聞き返す……。

「白粉は……養親も戸惑って……。どうすればいいのかわからな
かったみたい……。あの子……。本当に恥ずかしがり屋で……。その
上、何故かわからないけど……。人が信じれないみたいで……。なか
なか心を開いてくれないから……。」

恥ずかしがり屋か……。確かに……。俺とは未だに一度も会話して
くれないな。

「なるほど……。」

俺が頷いていると……

「私だって、この頃、ようやく会話できるようになったんだから・
・正直、白粉のことはまだ良く解らないわね……。」
と付け加えてくれた……。

「ふう〜む、俺が会話できるようになるのはいつのことやら……。

「そう言つて、考え込んでると・・・」

「えっと・・・瑠璃と白粉には、さっきの話は内緒ね？」

百合亜がそう言つてくる・・・。

「ん？なんでだ？」

考えなしに・・・解らないので、聞いてみる・・・。

「だって・・・あの二人が知つたら・・・どっちもショック受けるじゃない・・・。」

当たり前とも言わんばかりに答える百合亜・・・そうか・・・なるほど・・・このあいだの件と言い、こいつは・・・瑠璃たちに関してはよく考えてるみたいだな・・・お姉さんしてるんだな・・・と俺が感心してると・・・。

「ケイ兄？今何分？」

と百合亜が聞いてきた・・・。

「ん？ええ〜つと・・・。」

俺はそう呟きながら自分の時計を確認する・・・1時15分を指していた・・・。

「やべ！あと15分しかない！早く食べよう！百合亜！」

俺達はそう言つて、止まっていた箸を動かし始める・・・。

俺たちは、俺の上司に言われ、ある部屋の前に来ていた・・・社長室・・・そう書かれたプレートが掛かっている、真ん中が開くタイプで木製の扉の前に俺たちは立っていた・・・いかにもな扉だ・・・。しかし、なんでいきなりあの人なんだ？

「・・・ねえ？・・・ケイ兄？な・・・なんで・・・いきなり・・・しゃ・・・社長と・・・め・・・めん・・・面談に・・・ななるの？」

緊張しきつている百合亜がガクガクと震えながら俺に聞いてくる・・・

。。

「いや、解らない・・・なんでだろうな・・・。」

俺はそう答えながら遠くを見つめる目をする・・・正直、あの人には会いたくないんだが・・・。

「さて、いくぞ？準備は良いか？」

俺は視線を扉に戻しながら、そう百合亜に合図すると・・・

「う・・・うん・・・。」

と震えながらだが、百合亜は頷いた・・・よし！じゃあ・・・俺も腹を決めるか・・・。

コンコン・・・。

「人事部の嶋富です・・・実蔓さんを連れて参りました・・・。」

俺は扉を叩いて、そう内側にいる人物に告げる・・・すると、

「入りなさい・・・。」

と扉の中から、凜々しい声が聞こえ、入るように促す・・・うゝむ、入りたくない・・・はあ、入るか・・・。

バツ！

「失礼します・・・。」

俺達は開けると同時にそう言って、入る・・・。

目の前には地面をじゅうたんに敷き詰めた広い部屋、部屋の真ん中にはソファと小さな机の応接セット、そして、その奥には・・・大きな目の机があり、其処に・・・ストレートでワンリングスの黒い髪を腰まで伸ばし、茶色い瞳に釣り目の凛々しい顔をした、いかにもキヤリアウーマン風な女性が座っていた。彼女のまよつてる雰囲気は正直、俺にとって恐ろしい・・・。他者を寄せ付けないような、何かを感じ取れる・・・。

「おはようございます！社長・・・この度は私の我侬をお受け頂きありがとうございます！」

俺はそう言って、最敬礼の角度まで頭を下げる・・・。

「え？あ・・・。」

そう呟いて、焦りながら百合亜も頭を下げる・・・。

かつちゃ……。

椅子から離れる音がする……そして、気配が段々こちらに近付いてくる……。まだ俺は頭を上げない……。

「顔を上げなさい……嶋富君……。」

「はい……。」

俺は言われたとおり頭を上げる……。すると、目の前に社長が腕を組んで立っている……。体形は相変わらずすらつとして……。それが凜々しさを倍増させる……。百合亜は先に頭を上げてたよ。うだ……。

「此間の1件覚えてるわよね？」

この間の1件とは掃除機の件だ……。頭をもう一度下げようとし、「はっ！……その件は本当に申し訳あ……。」

パシーーン！思いつつきり小気味よい音がする……。

言い終わる前に俺の右頬に痛みが走る……。顔も左を向いていた……。痛いな……。普通に涙目になりそうなほど痛い……。

「あれのおかげで我が社はどれだけの損害を被ったかわかっているの？」

きつい言葉だ……。正直、俺ではどうしようもないくらいの損害を被っているのは解っている。

「はっ！申し訳ございません！」

頭をもう一度深く下げる……。

「私がお前を拾ったのは損益を被るためではない……。利益を上げるためだ！……次はないぞ！」

「はっ！」

社長の厳しい言葉に返事をして頭を上げる……。それを確認した社長は『ふむっ……。』と頷き。今度は俺の2、3歩横に立っている百合亜の前に立った……。百合亜は今にも逃げ出したような顔をしている……。

「あなたが実蔓さんね……。ようこそ！我が社へ……。あなたの能力には目を見張るものがある！あなたを心から歓迎するよ……。」

そう言つて社長は・・・笑顔で右手を差し出して、百合亜に握手を
求める・・・。しかし、百合亜は

「あ、えつと・・・。状況が理解できない
と逡巡して一向に手をとろうとしない・・・。状況が理解できない
のだろうか・・・。」

チツ・・・チツ・・・チツ・・・チツ・・・。

俺の腕時計が秒針を刻む事数秒・・・まだ、百合亜は社長の手を取
ろうとしない・・・。百合亜は社長の顔を見つめている・・・状況
が理解できない訳じゃない・・・明らかなる拒否だ・・・。

「・・・。」

ガシッ！

業を煮やしたのか、作り笑顔のまま社長が無理やり百合亜の手を取
つた・・・その刹那！

「嫌！嫌！嫌あああ！」

百合亜が拒絶の叫びをあげ、社長の腕を振り払う・・・。その拍子
に百合亜はドスンッ！と地面に尻餅を着いた・・・が・・・そんな
事を気にする事もなく・・・。

「怖い・・・怖い怖い怖い！・・・誰か・・・誰か助けて！」

小声でそう呟き・・・頭を抱え、背中を丸めて小刻みに震えている
・・・。

何が起こつたのだろうか・・・俺には全く理解ができない・・・。

そんな俺と同じように社長も理解ができないのか・・・目を大きく
して百合亜を見つめるだけだ・・・。

「すみません・・・社長・・・。」

そう言つて、頭を下げてから百合亜に近づく・・・。

「怖い・・・怖い！・・・誰か！・・・誰か！」

俺の近付いた事に気づかないのか・・・そう呟き、頭を抱えたまま
動こうとしない・・・。まだ震えている・・・。そんなにこの人が
恐ろしかったのか？・・・いや、いくらこの人が恐ろしいからつ
て・・・ここまで怖がる事はないはず・・・というより、この怖が

り方は異常だ・・・対人恐怖症でもない限り・・・しかし、百合亜にそんな節はなかった・・・では、何故？俺は百合亜野前に座り込む。

「ううっ・・・誰か・・・誰か助けてよぉ・・・。」

考えてる暇なんかなかった・・・百合亜の気を取り戻させなければ・・・。

「おい、どうしたんだ！百合亜！」

俺は百合亜の両肩に手を掛け、二、三度揺さぶる・・・。

「怖い・・・私のせい？私のせいじゃない・・・。あの人が・・・あの人が！」

揺さぶったので顔が上がった・・・咳く百合亜の顔を見ると・・・目に光がない・・・意識がどこかに行っている？それに・・・あの人が誰だ？解らない事尽くしたが・・・やはり、このままではいけない・・・。不安がっているし・・・あまり使いたくない方法だが・・・仕方ない・・・。

バツ！

俺は百合亜を抱きしめる。

「大丈夫だ・・・お前の傍には俺がいるぞ？」

そう言つて、俺は百合亜の頭を抱きしめたまま優しく撫でる・・・。

「ケイ兄？」

百合亜が質問してくる・・・。

「そうだ・・・ケイ兄だよ・・・。」

その質問に俺は安心させようと優しく答える。

「・・・。」

安心したのか、咳きはなくなった。そのまま撫でつつも、百合亜の様子を見る。すると、みるみるうちに百合亜の目に光が戻り・・・。

「あ・・・えっと・・・私・・・。」

どうやら、意識もしっかりしてきたようだ・・・。

「えっと・・・これはその・・・えっと・・・。」

抱きしめられてるのが恥ずかしいのか・・・百合亜がそっぴいなが

ら、赤くなつていく。

「……………」

「……………」

俺はまだ不安なので抱きしめたまま無言になつてしまった。

「……………んで？いつまで、そんなラブラブしてるのかな？……………ケイ兄さん？」

後ろから社長の半分怒つたような声が飛んできた……………振り向きたくない……………恐ろしいから……………。俺の後ろに立っている社長を見て、状況が飲み込めたのか……………百合亜は

「……………離しなさいよ！えい！えい！」

そう言つて、俺を殴つてきた……………ふむ、もう完璧に大丈夫だろう……………。そう思い、百合亜を抱きしめるのを止め、百合亜から離れて立ち上がる……………。なんか……………離れる際に残念そうな顔をしてたが……………気のせいだろう……………。

パンパンッ！

百合亜も立ち上がつて、自分のスーツに着いてしまった汚れを払う……………。

「啓志……………説明しろ……………」

いつの間にか、呼び方が下の名前に変わっている……………さっきの半怒りの感じと言い、不味いなこの状況……………。

「い……………いや、俺も良く解りません……………鳳さん……………」

後ろ頭に手を当てて、苦笑しながら、俺は振り返る……………。

「うるさい……………黙れ……………。女の敵め……………」

そう言つて、鳳さんは俺をギロツと睨みつけてくる……………。俺を殺そうとしかねないような……………損な雰囲気を感じる睨みだ……………恐ろしい……………しかし、自分で説明しろつていったじゃないか……………。

「はあ……………」

溜息を吐きながら鳳さんは椅子に戻つていく……………。

「んで？実蔓さんだっけ？」

座って早々、そう百合亜に話しかける鳳さん……。

「あ、はい……。」

百合亜が返事をする……。

「とりあえず、ここに来て説明して頂戴？」

鳳さんが机の前に来て説明するように促した……。

「は……はい……。」

百合亜はそう返事して、鳳さんの机の前に行く。

「なるほど……『黒髪』『年上』『女』で……それで、『コミュニケーション』がねえ……。」

椅子の肘掛けに左腕をくの字にして置き、その腕で頭を支えながらそう答える……。

百合亜の説明によると……俺と知り合う前……もちろん、子供の頃のことだが……に……トラウマになる事があって、『女性で年上かつ、黒髪の人』に『触られると』パニックを起こしてしまいうらしい……。普段は固まるのと、頭が混乱する程度だが……今日はどうも鳳さんの恐怖のせいか……あんな事になってしまったらしい……。

「しかし……私は、あんまりにもな対処の仕方だったから……啓志が実蔓さんを口説いて、この会社に入れようとしたのかと思っ

て心配になったよ……。」

ついでに、鳳さんは俺と百合亜の関係まで聞いたので、そう話してくれる。

「そんな訳無いじゃないですか……。それに、単なる緊急措置ですよ……。」

取り合えず、口答えをするが……。

「うるさい……お前は少し前まで、酒の席で知り合った子連れ込んでただろうがっ！」

殺すぞ！と言わんばかりの視線を俺にくれる鳳さん……。

「……そうでしたっけ？」

俺は顔を横に背けて、とぼけておく……。

ぎゅむ！

「いてっ!？」

何故だか解らんが……百合亜に足を思いつきり踏まれた……なんなんだ？

「なんだよ？」

俺は心当たりがない……と思うので直接聞いてみる……。

「ふん！自分で考えなさいよ！」

百合亜はまた不機嫌のようだ……。何故だ？

「わからないなあ……。」

俺が考え込んでいると……社長は俺と百合亜を見比べて「はあ……。』と溜息をついた後……

「全く……此間の件といい……柴木に頼み込まなかったら、私はお前を拾わなかったんだぞ？」

と釘を指してきた。この人、社長こと、鳳 佐代子 さんは……俺の恩人、柴木のおっさんの頼みで俺をこの会社に入れてくれたのだ……。

「いえ……感謝してますよ……鳳さんに貢献したいとも思ってます……。」

わかっている……本当にありがたいことだ……今こうして生きているのも鳳さんとおっさんのおかげだし……正直な気持ちを言うものの……。

「だったら、ちゃんと利益を上げる！それと社長と呼べといってるだろ！私が他の社員になめられるだろうが！全く……。」

と不機嫌そうに鳳さんが言う……。まあ、結局、損益しかまだ与えてないからこうなるよね……。はあ。鳳さんの厳しい態度は……自分が舐められて、他の会社との交渉で甘く見られてはダメだ……と言う事で普段は厳しくしているらしい……。あと、男性社員は厳

しくしてなんぼ・・・とも言ってたな。どっちにしろ・・・俺は普
段の鳳さんが苦手なのは変わりないのだが・・・。

「ああ、すみません・・・社長。」

俺はそう答える・・・。

「・・・まあ、解った・・・実蔓さんの件は私が何とかしよう・・・
。つて事で、啓志、お前は仕事に戻れ！」

鳳さん・・・いやいや、社長が右手を前後に振って、あっち行けと
指示する。

「え？いや、面接はどうなったの？」

いや、まさか・・・落とすとかそう言うわけじゃないよね？ちょっと
と不安なんだけど・・・。

「ん？もちろん合格だよ？つて言うか、もとから採用する気だった
し・・・。」

なんでもないように社長が言う・・・なんだ、そうだったのか・・・
つて・・・最初から採用する気って・・・なんでだ？・・・まあ、
いいか。

「ああ、そうですか・・・じゃあ、私はこれで失礼します・・・。」

俺は社長室から出るために、扉に向き直る・・・。

「ああ・・・そうだ・・・嶋富！」

二、三步歩いた後で、社長に呼びかけられる・・・。

「はい？」

上体を捻って俺は返事をする・・・。

「実蔓さんには接触禁止令を社員に出すから、会社では実蔓さんに
触るなよ？」

接触禁止令？・・・なるほど・・・。ちゃんと考えてくれてるよう
だ・・・。

「解りました・・・お願いしますよ・・・社長？」

俺は右腕をくの字に曲げ、右手の小指と薬指を折り、額に人差し指
を当てて、それを少しピツと額から離して、手を右斜め前にやる・・・
。所謂、挨拶の動作(?)である。

「ああ・・・任せとけ！」

社長は二方つと笑いながら返事をする・・・ふむ、これなら安心できそうだ・・・。

俺は安堵して、社長室を出ようとする・・・。

「ああ、それと・・・嶋富？」

更に呼び止められる・・・。

「何でしょうか？」

俺は再び振り返って社長に尋ねる。

「柴木とは最近会ってるか？」

柴木のおっさんか・・・会社入ってから、あんまり会って・・・いや、一回だけ会ったか・・・まあ、最近は全然会ってないけどな。「ん、いや、全然会ってないですよ？」

俺は考え込んでから答える。

「そうか・・・じゃあ、会ったら、偶には私に会いに来て！と言っておいてくれ。」

そう言った後、社長は『さ、行け！』と言わんばかりに、右手を前後に振る。

「了解しました・・・。」

俺は社長室を後にした。

自分の業務に戻った俺は・・・またもや昇給・昇格の査定作業に入っていた・・・。

「やれやれ・・・ろくな奴いないな？・・・って、そりゃ・・・俺もか・・・。」

結局、会社に損害を与えてしまった俺が今見てる資料に載ってる人たちが馬鹿にできるわけが無い・・・はあ、全く・・・あいつ・・・吉田は俺には合わないタイプの人間だな・・・多分。

ふと手が止まる・・・そういえば・・・なんで急に社長が呼び出したのか・・・上司である課長に聞いてみたんだが・・・『急に・

・私がやりたいからやる！つと云って聞かなかった．．．』そう
だ．．．なんだって言うんだ？うん、まあ、結果的に．．．あの
人だから百合亜は合格できたんじゃないだろうか？だって．．．女
性には甘いから．．．あの人．．．。俺の上司は男だから．．．確
実に落としただろうな．．．。

しかし．．．百合亜のトラウマってのは．．．一体なんだろうか
？．．．すごい反応だった．．．あそこまでは．．．。俺と会う
前に一体、何があったんだろうか？それに．．．あれをどうやって
解決しよう．．．あのまま放置しては、これから先に支障があ
ることは明確だ．．．だから、どうにかして直さなければ．．．。

幸い、今は社長が接触禁止令（？）を出してくれるらしいから、
あんな事態にはなる事はないだろうが．．．。それにしても．．．
やはり、社長は頼りになるな．．．早速、対策を考えてくれるなん
て、それに．．．俺と同じように百合亜を雇ってくれるようだし．．．
・大船に乗ったような感じになる．．．。まあ、男性社員には厳し
いが．．．特に俺．．．。人間的には好きだ．．．が、俺はあの人
が苦手だ．．．。苦手なんだ．．．。厳しいから．．．。

ああ、しかし．．．借金、どうした物だか．．．どう考えても返
していくのは無理だろうな．．．。利子だけしか払えそうに無いと思
うんだが．．．はあ．．．どうしよう。

「おい！嶋富！ちゃんと働け！」

「はい！すいません！」

考え事しすぎて、完璧に手が止まっていたらしい。少しは動かして
るつもりだったが．．．遠目から見ても、見えるほどだったらしい。
・課長が席に座ったまま怒ってきた。

この間の一件で会社に損害与えたと、ちゃんと働かないと、社長
に申し訳ないな．．．。さ．．．真面目にやろう．．．。

仕事が終わわり・・・百合亜と一緒に家に帰ると・・・びつくりした・・・リビングに立って、物置になっていた部屋を見る。

「これは・・・すごい・・・。」

その一言に尽きる・・・。何故かと言うと・・・あの家具だらけの汚い部屋が・・・家具がなくなつて・・・（布団が無いため、寝ることはまだできないが）・・・住める程度になつていたからだ・・・。

「おっさん・・・あんたつて・・・結構だらしないんだな・・・。」
呼ばれたのか・・・片付けに来ていた瑠璃の同級生、隆平が勝ち誇つたような眼で見る・・・。彼は、ジーパンを履き、内側に胸の辺りがだぼつとした白いシャツを着、赤と黒のチェック柄の上着を着ていた。

「まあ、なんとなく捨てられなかったのさ・・・。」
そう隆平をかわし、他に目をやると・・・。

「よっ！お兄さん・・・あんたもやるねえ！」

と中年で鼻の下にちよび髭を生やしたおっさんが俺に右手を上げて挨拶してきた・・・。

おっさんの風貌は髪は前髪を左に8、右に2くらい流している・・・俗言う・・・アシンメトリーって奴か？後ろ髪は肩までのようだ。

顔からすると30代後半のような雰囲気がある・・・。
身長は・・・柴木のおっさんと同じくらいか？180cmくらい有りそうだ。

どこかで見たことがあるのだが・・・どうも思い出せない・・・。

「あんた誰だ？」

失礼だとは思ふ・・・が、寧ろ、自分の家に知らない人間が入り込んでることを不審に思い・・・尋ねる。

「つれないなあ〜お兄さん・・・結構な頻度で会つてたじゃないか？俺が入れたものをあんたが飲んで・・・。」

茶色のベルトを通し、青いデニム生地ズボンに全体が灰色の半そでシャツ・・・丸首の部分は白い生地のような・・・と言つた服装

のおっさんがからかう様にして、言ってくる。

「俺が入れたもの？」

「・・・何を言っているのだろうか・・・このおっさんは・・・うゝむ、ダメだ、思い出せない・・・どこかで見たことがあるんだが・・・。」

「平坂さん！？・・・なんでここにいますか？」

「ちょうどおっさんに気づいた百合亜がそう言っただけ・・・目の前のおっさんに話しかける・・・平坂・・・誰だ？」

「いや、なんで？って・・・女の子だけで粗大ゴミを捨てようって事になってる・・・って聞いたから飛んできたのさ・・・。」

「ニツカリ！とでも言わんばかりの笑顔で答える平坂と呼ばれたおっさん・・・うゝん、この声・・・どこかで聞いたことがあるんだが・・・。」

「ああ、なるほど・・・そう言うことですか・・・。」
「百合亜が納得したように頷く・・・。」

「ま、俺って・・・そう言うの放っておけないからさ！」

片目を瞑ってウインクをし、口元にニンマリとした笑顔を作り、親指を立てて答える平坂と呼ばれたおっさん・・・。なんだらうか・・・この声でのこの変な軽い感じ・・・確かに、どこかで相手した覚えがあるんだが・・・いや、相手をされた？とでも言うべきなのか？
「どうしたの？ケイ兄？」

百合亜が不思議そうに尋ねてくる・・・そんなに俺は悩んでる顔をしていたか？というか俺はこの頃顔に出てるのだろうか？気をつけなければ・・・。」

「いや、どこかで会った覚えはあるんだが・・・な・・・。」
百合亜に気づかれるようならば、隠してもしようがないので、正直に答える。

「まだ解らないのかよ・・・おじさん・・・悲しいぜ・・・。」
目の前の平坂と呼ばれたおっさんが肩を落とし・・・一気にテンションを落とす・・・。なんだ？このテンションの上がり下がり

しさは……。

「まあまあ、平坂さん……えつとね……ケイ兄……この人は……キャットランのバーのマスターさんよ？覚えてないの？」
百合亜がそう励ました……ん？最後なんか言わなかったか？キャットランのバーのマスター？目の前の平坂さん（？）を再度見返す……。

「どうも！キャットランのマスター……平坂 雄太です！」
自己紹介をしつつ……笑顔でおちゃらけた挨拶をこちらにくれる……。

「ええ〜つと……う〜ん……なるほど〜……。」

「申し訳ございませんでした！」

「そんなこととはつゆ知らず……失礼なことを申しまして……。」

顎に右手を当てた体勢から、瞬時に最敬礼の角度まで頭を下げた謝る……いやはや……申し訳ない……俺ってそんなに薄情だったか？一週間に1ぺんは会ってるし……昨日、会ったばかりだろうに……。

「いやいや……気にしないでいいよ……。あまり喋らないせいか、割とお客さんに顔を覚えられないタイプだから……。ほら、頭を上げて！」

そう言っただけを慰めてくれる……。うむ、いい人なんだろう……。な……。この感じだと……。

「いや……。本当に申し訳ありません……。」

申し訳ない……。それ以外思い浮かばないほど、失礼なことをした……。あれほどの頻度で会ってる人の顔がわからないとは……。しかし、なんで、俺の家にいるんだ？

「まあまあ……。」

平坂はそう言っただけの俺の両肩に両手を ポンツ と置くと顔を俺の耳に近づけてきた。

「あんたもなかなかやるねえ〜、女の子を3人も家に連れ込むなん

て・・・ハーレムでも作るのかい？」

「何を言ってるんですか?!」

驚いて反射的にそう言い返してしまった・・・しかし、平坂は悪びれも無く・・・。

「ふふふっ・・・冗談さ・・・事情は大方聞いてるよ・・・。」

そう意地悪そうな笑みで返してくる・・・。って・・・どこまで百合亜の奴は話したんだ?・・・まあ、いいか。俺もさすがに、頭にくるので・・・。

「失礼ですが・・・あなたも私の前に・・・同じようなことをしたんですよ?」

と言い返すと・・・。

「ん?俺は勿論、そのつもりで連れ込んだんだよ?」

とにんまり笑いながら平坂は返してくる・・・マジなのか?それ・・・犯罪だろ?そのつもりとは・・・ハーレムのことだろう。いや、でも考えてみれば百合亜たちが被害を受けてないって事は・・・言ってることは嘘なんじゃないのか?

「嘘でしょ?」

俺が真面目に聞き返すと・・・。

「ん?・・・ふふっ・・・さあね・・・。」

あっさりと・・・あやふやにされて終わってしまう・・・このおっさん・・・本当にいい人なのか・・・解らなくなってきたぞ・・・全く・・・。

「平坂さん!そんな奴と話してどうするんですか?ロリコンが移りますよ!?!」

俺と平坂との間に、そう言って・・・隆平が割り込んでくる・・・なんだこいつは・・・?人をロリコン呼ばわりしやがって・・・。

「平坂さん・・・こんな奴、放っておきましょうよ!大した奴じゃないんですから・・・平坂さんの品格を落とすだけですよ?」

隆平の奴が・・・散々な事を俺に言う・・・こいつ・・・このあからさまな反応は・・・。

「なんでそんな事言うんだ？太田君・・・例えそうだとしても・・・この人もれつきとした俺のお客さんなんだよ？」

お・・・さすが・・・（『例えそうだとしても』は余計だが）・・・俺より年上だな・・・ちゃんと隆平の奴を諭してる。

「俺は・・・平坂さんを目標してるんです！・・・自分の店を持つてるし・・・自立してるし・・・。だから、そんな平坂さんに・・・このロリコンなおっさんは悪影響になると思ってる・・・。」

隆平がそう反論する・・・。ちよつと待て！さっき、そのおっさんは、お前の彼女を巻き込んでハーレム作ろうとしたんだぞ！？俺より危険だろ！・・・まあ、言いとして・・・やはり・・・憧れていたのか・・・自立くらいは俺もしてるんだけどなあ・・・ああ、なんか悲しいなあ。

「嶋富さんは、俺にとって大事なお客さんだよ・・・それを悪く言うのは感心しないな・・・それに俺なんかを目標にするんじゃない・・・俺は大した人間じゃない・・・。」

更に諭す・・・んん？途中で・・・暗い顔を見せたぞ・・・。「でも！」

隆平が更に否定を続けようとした瞬間・・・。

「えつと・・・平坂さん・・・大方の片付けはできましたので・・・今日は帰りませんか？」

と今まで物置部屋の片づけをしていたらしい瑠璃が割って入る・・・。

「うつ・・・つく・・・。」

「ああ、そうだな・・・。」

その言葉に・・・隆平が苦々しい顔をし、平坂は相槌を打つ・・・。おかげで、話が途切れた・・・。

「ところで・・・あの部屋の粗大ゴミはどうなったんだ？」

話題を変えるために・・・気になっていたことを瑠璃に聞く。恐らくは隆平か・・・まあ、平坂が処理したんだろうけどな・・・。

「あ・・・それは、えつと・・・平坂さんが・・・来る前に業者に

頼んでくれていて・・・全部引き取ってもらいました。マンションの一階までは隆平と平坂さんの2人が運んでくれて・・・。」
瑠璃が答えてくれる・・・うむ、やはりそうか・・・では。

「それは・・・ありがとうございます・・・。」

俺は平坂に向かって一礼する・・・そして、

「ところで・・・粗大ゴミの回収料金はいくらでしたか？払いますよ？」

と聞く。・・・運ぶのもやらせておいて・・・粗大ゴミの回収料金まで払わすと言うのはなんとも申し訳ない・・・面目が立たない・・・。ぜひとも払わせて欲しい。しかし、

「いや、大した料金じゃなかったから気にするな・・・。」

と言って平坂は一向に言う気配が無かった。それどころか・・・

「まあ、俺の好感度アップのためだからさ・・・ここは素直に引き下がってくれ。」

と耳打ちしてきた・・・。こいつ・・・まともかと思っただが・・・やっぱり危険だ・・・。

「さて・・・みんな帰ろうか！」

そう言って平坂は玄関に向き直って、歩き始める・・・。

その後に、隆平が続き・・・他の2人も続く・・・。って・・・百合亜は？

「ねえ・・・ケイ兄って・・・ロリコンなの？」

そう言う百合亜の声が聞こえて、俺の横に百合亜が立っていたことに気づく・・・。

「何でそんなことが気になるんだ？それよりも、平坂には気をつけろよ・・・一応な・・・。」

そう俺が言うと・・・百合亜は・・・

「妬いてるの？」

と聞いてくる・・・おい・・・なんでそうな・・・まあ、解らんでもないが・・・。

「な訳無いだろ・・・それよりも・・・早く行けよ。」

ここは冷たく答えておく……。

「それから、明日は10時ごろに例のショッピングモールで買い物な……みんなに伝えて置けよ？」

「ふん！解ってるわよ！ケイ兄のばーか！」

百合亜は急に不機嫌になつて……さつさと玄関に走っていった。

もうみんな靴を履いて玄関を開けて外に出ており、瑠璃がドアを支えて百合亜が出てくるのを待っていた……。百合亜のやつ……挨拶も無くそのまま行ってしまった。そんなに怒ることか？

「では、今日はこれで……。」

百合亜が靴を履いて、外に出たのを見計らつて……瑠璃が挨拶をする。

「ああ、今日はどうもありがとう……。」

それに対して俺がそう答えると……。

「いえいえ……自分たちのためですから……。」

瑠璃はそう謙虚に言う……全くもって俺が本来やらなければいけないことをしてもらつて……助かっていると言うのに……いい子過ぎるくらいだな。

「では、おやすみなさい。」

と瑠璃が扉を閉めつつ、一礼をするので、

「ああ、おやすみ……また明日な……。」

と言つて俺は手を振る……。

パタンッ！

玄関が閉まる……。そして、

タツ……タツ……タツ……。

と足音が遠のき、人の気配が消える……。

「ふう……。」

溜息をつき……ようやく気を抜く……。ドツと疲れがなだれ込む……緊張の連続だったからだろう。

「疲れた……もう、晩飯はいいや……。」

そう言いつつ、俺は時計を確認をする……。10時を過ぎていた……

。。

「。。。歯を磨いて。。。寝よ。。。」

いらなと言った物の。。。多少時間があれば、健康のためになんか食べておこうかな？と思ったが。。。たっぷりと睡眠時間が欲しいので、やめることにした。

洗面所で歯を磨き、さっさと寝室に行き、ベットに身体を投げ出す。。。

「ふう。。。」

今日は色々なことがあった。百合亜の借金は3000万だとか、百合亜は半対人恐怖症(？) 見たいなもの(言い方が酷い気がするな。。。) だとか。。。あれはどうにかして直さなければ。。。この先はやっていけない。。。しかし、どうすればいいんだ？全く解らない。。。はあ。。。あと、瑠璃は瑠璃で。。。いつか爆発しなければいいが。。。そして、白粉はあまり人を寄せ付けない性格らしい。。。ううむ、いつになったら俺は仲良くなれるのやら。。。。

「まあ、取りあえず。。。寝るか。。。」

そう呟いて、俺は目を閉じて、意識を手放した。。。

新居と借金とお買い物（後書き）

買い物まで行けませんでした…orz

次回で主人公周りの人物は一通り出るようになります…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6984v/>

超能力と魔法な物語

2011年10月9日14時07分発行